

漢文教科書卷二 備考

漢文教科書卷之二備考目錄

上杉景勝
魚貫八兵衛
抹香鯨
華聖頓謝過
宇都宮大和
牧馬
本多重木
荒木又右衛門
地球
森蘭丸
瀧澤馬琴
地震
米田某
乳雀
山行
捕鯨說
鑛工



沈默會
記融鼠
重盛諫父
真田餘一
忠勇兵士
本多氏絕命詞
宇治河先登
了伯聽平語
降參
原田龜太郎畫像記
義仲戰死
阿閉掃部
弗蘭克林
鴨越
本多三彌
勝重薦子
鐵門破壞

一七
一八
一八
二九
二九
三〇
三〇
三四
三五
三五
三八
三一
三一
四一
四一
四三
四三
四四
四四

義經襲屋島
探萱記
堀川夜襲
大久保彦左
正成守千窟
修學旅行
富士山
獅識奴
狩虎記
鳥居元忠守伏見城
送正木生遊學東京序
馬之演技
湊川之戰
題楠公訣子圖
熊本廉士
太田南畝
圓山應舉

四五
四六
四七
四七
四八
四八
四九
五〇
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五五
五七
五九

漢文教科書卷之二備考目錄



| | | | | | |
|----------|----|-------|----|---------|----|
| 四條噫之戰 | 五九 | 巨盃 | 六四 | 新宿御苑畢景記 | 六七 |
| 楠左衛門尉警塚碑 | 六三 | 忘却先生傳 | 六五 | | |
| 芳野懷古 | 六四 | 山田長政 | 六六 | | |

目錄終

漢文教科書卷之二備考

上杉景勝

○摘解 鹵簿 鹵は盾なり天子の車駕の次第は兵衛甲盾を以て外に居て前導を爲し皆之を簿に著す故に鹵簿といふとぞ。 肅肅 敬みてひそく音のする意

魚賈八兵衛

○摘解 斥昌石切家 斥なり遠ざくるなり又屏るなり。 耶那の俗字にして「かしらんと譯し疑ひて未だ確定せざる辭。 哭 大聲揚げてなくを哭といひ細き聲たて、涙あるを泣といふ。

○附記 後光明帝諱は紹仁後水尾帝の太子にして明正帝(女帝)の禪りを受け給ひ御年十二歳にして御位に即かせられ在位十一年にして崩じ給ふ帝叡明にして學を好み給ふ性雷を畏れ給ひしが程子の克己須從性偏難克所克將去といへる語により疾雷の日殿端に靜坐して其の性を矯め給ひき又復古の志おはしまして

常に宣はく、皇道の衰へしは、朝臣源語等の書に耽り、淫靡を事とせし故なり、朕甚だ之を惡むと。専ら御心を文學擊劍等に寄せ給ひたり。其の他、武家の上下を著くるは、古例にあらざるとて、之を改めんと思召し、又大學寮を再興せんと遊ばされし等の御事ありしが、御志の達し給はぬ中に、崩御あらせられき。

抹香鯨

◎摘解 抹香鯨は、其の色、抹香の如くなれば、此の名ありといふ。銛シ息廉切、もりと訓ず。鯨を刺すに用ふる具にして、其の製種々あり、今其の一種を示せば、左の如し。



綦 綦に同じ、渠之切、極なり。

◎附記

明治三十四年四月七日發行の時事新報に「抹香鯨捕獵談」と題して、高橋新太郎氏の談話を掲載せり。今其の談話中の二三を節録すれば、左の如し。

本邦に於ける抹香鯨の漁場は其區域極めて廣く、扱は紀州沖又は小笠原島近海より北は千島の沖合、更に進んで露領コンマンドルスキー列島附近即ち白令海ベーリングに到る迄、抹香鯨の群を見ざる所なく、就中初夏の候より中秋の頃は陸前陸中の沖合所謂金華山沖、秋末より冬春の間は房總沖合より常陸磐城の沖合に最も多く群游して居ります……扱て茲で私が出獵した時の實驗談一二を申上げませう、或日本船の右舷前方約四哩位の處に三十頭許の抹香鯨が二群になつて游泳して居るのを認めましたれと最早夕刻では有り波も荒し已むなく追撃を止めましたが、其翌朝未明に起きて見ると本船の周圍は該鯨の大群で取巻かれて居りました。ソレといふので乗組員は夫れく受持の漁艇に乘移り鯨群目蒐けて進む中に一頭の大なる鯨は最先に私の乗て居る艇の傍へ悠々と泳で來ました。機失ふべからずと中砲の靚を定めて引金を引きますと都合の悪いことには二回まで雷管が發しません、其中に鯨は又悠々と水中に入りましたから私の艇は更に他の鯨群に向けますと先に沈んだ鯨は本船の艦の方を廻り唯今左舷より下した許りの一艘の間際に浮び出ましたから其艇は咄嗟の際之を突きました。所が未だ檣帆、索具類を取片付

ける暇も無かつた時でありましたから銛は美事に命中しましたけれど其鯨の驚き怒つて急に泳ぎ行く際銛綱が艇の檣に纏つてアハヤと云ふ間に艇は水中に引き込まれて了ひました私の艇は鯨の追撃どころではない先づ其艇の助けに急いで参りましたが此鯨の性質として水面淺く引去り又直ぐに水面に現出するものであります故艇は程なく浮び出し乗組員にも怪我はなく何れも私の艇に乗り移りました。又或日館山を出帆し彼の月島丸遭難の時の暴風を凌いで北東に向て漂流すると數日後の夕刻本船の右舷約三哩位の所に鯨の飛躍するのを見ました段々近づいて見ると抹香鯨の體も認められ噴水も見えましたから早速二艘の艇を下して此方に進みました行く／＼抹香鯨游泳の状を見るに或者は巨大なる頭を海面に突立て或者は尾鰭を翻し又或群は繋ぎ合せたる材木の漂ふが如く巨大なる脊を夕燒の光に曝らし七八頭乃至十四五頭宛の群が半哩乃至一哩位を隔て都合五群になつて居ります二艘の艇は勇み進んで一群の列に近づき其一艘は群の列より少し後れて泳いで居る兒連の頭の鯨に乗掛つて美事に突きますと鯨は頭を上げ體を躍らし尾鰭を振廻して暴れ出しましたが之を見ると諸方の群

は鷲地に猛進して來ましたから他の一艘は其群中に割つて入り一頭の鯨の正面頭部より行き違ひさまに逆に銛を突て見事命中致しましたすると其群は兩方に分れて相方共に狂ひ廻はつて居りましたが後より突いたる艇は其銛綱を少しも伸ばさず手繰詰めて其鯨に乗り掛つて素早く破裂矢を打ち劔を刺しますと噴水口より血烟を吹き初め忽ちにして頗る猛烈に艇を曳き環狀にぐる／＼廻ると凡そ三分間位にして止んだかと思ふと其儘仰向になつて斃れました然るに先きに突いたる鯨は中々威勢強く暴れて殊に今日の群の大部分が之に蝟集し且つは時既に夜に入り四方暗くして破裂矢も劍も思ふ儘に使用することが出来ませぬが艇は幸にも本船の在る方に引かれて近寄て來ましたから直に其銛綱の一端を本船に擲げ渡して之に縛り付け一條の銛綱では又切るゝ恐れがありますから艇は更に又其鯨に接して銛を突入れ再び本船に漕ぎ歸りて其銛綱を渡し都合二條の銛綱で引留て居ましたすると其鯨が未だ死なないのですから他の鯨群も矢張り其前後左右を取巻きて本船の前方附近に四五十頭狂ひ廻り或は離散し或は蝟集し時には行儀よく背を並べて交々潮を吹き乍ら整列し來る様恰も本船目掛

けて鼓噪して進軍するかの如く實に美觀で珍らしい見物でありました

華聖頓謝過

◎摘解

罇

祖昆切尊と同じ酒器なり。尊は俗に樽に作り、たると訓ず。然れども

我が國のたるにはあらず。瓶の類と解して可ならん。業已業は既己の字と異なりて、しかするからはといふ意なり。業已報我とあれば、すでに我れに報いたるからはといふ意なり。

輸委輸なり、盡なり、送なり、輸心は、心を打明け盡す意なり

宇都宮大和

◎摘解

褻臣

褻は押れ近づく意にして、謂ゆるお相手なり。解紛事のも

つれをとく。咄咄驚き怪む聲なれば、やあく」とでも譯して可ならんか。闕

奥向のお錠口、即奥への入口。鄙哉鄙哉しはいかなく。逐鼓雨袖云

云 鶏の蹴合に、勝ちたる鳥は、羽ばたきして、鯨波の聲を作る。團伴其の眞似して、威張りしなり。簡率かざりけなく、無造作なり。

◎附記

お相手の團伴が、年七十餘とあれば、東照公も七十前後の時の事なりけん、此の老人たちにして、其の無邪氣なる事、恰も子供の如し。聞く歐米人なども、老

いて益壯にして、若者と伍を爲し、無邪氣なる遊びして樂むとぞ。彼れといひ、此れといひ、誠にうらやましき氣風ならずや。吾人は、一般に夙成早老の傾きあるが、とは何と加して矯正したきものなり。それにつきては、もし生徒の中に、成人びたる者あらば、子供らしくせよ、活潑にせよ、東照公は、どうであるといひて、氣象を開豁ならしむるやう導かれたきものなり。

牧馬

◎摘解

四五年去其職

馬の大將分は、熱心に其の職責を盡すが爲に、心

身疲勞して、其の任期、四五年より永くは勤むる事能はざるものなりといふ。交

替 替は他計、切廢なり。猶交代といふが如し。

◎附記

長上の命に従ひ、秩序を守るは、少年子弟の最も當に務むべき事なり。此の馬を藉りて、此の事を訓誡せば、徳性の涵養上、效益あるべし。

本多重次

◎摘解

粗豪あらくしく、氣強き事。太簡大ざつぱり。

鬼支那にて

鬼といふは、幽靈の事なり。日本にては、鬼の字をかにの意味に用ふ。彼此無偏

左の参照中に見ゆる「どちへんなしの譯なり。どちへんなしは、どちへんかたよらぬ意。不屑煩碎屑は潔なり、くたくしく面倒臭き事を潔しとせず、即きらふ事。書書の原文は、一筆示す火の用心おせん瘠さすな馬こやせ、或はいふ、一筆啓上火の用心おせん泣かすな馬こやせ、後文優れるやうなり。

◎参照 永祿八年三河國大略御手に屬しければ此年二月七日始て奉行職を置れて本多作左衛門重次高力與左衛門清長天野三郎兵衛康景三人に仰せて其職を掌らしめらる此時に三河の歌に佛高力鬼作左とちへんなしの天野三郎兵衛とうたふ重次はおそろしげなる男のおのが云たき事をば有の儘に打いひいかにも思慮有へき人とも見へすかゝる職務に堪へきものにあらすと見えしに心正しく直くしかも民を仕ふに恵ありてうつたへを聞わかつ事明らかなりしかは人皆徳川殿の御はからひを感じ參らせしと云なり(藩翰譜)

荒木又右衛門

◎摘解 鳥籠山 所在地も讀方も詳ならず。蓋荒木又右衛門は、伊賀の人にて、

此の話は、幼少の時の事なれば、多分伊賀の國ならん。又江州犬上郡に現今正法寺山といふものありて、昔は鳥籠山と書き、このやまと讀みたる由なれば、或は同じ讀方かも知れず。

◎略傳

荒木又右衛門吉村は、伊賀の荒木村の農にして、膂力衆に勝れ、擊劔を好む。柳生但馬守、宮本無三四等に就きて、諸流の劔法を極む。郡山の藩主本多甲斐守に仕へ、秩祿五百石を食み、藩の師範役たり。其の妻は、松平忠雄の臣渡邊數馬の姉なり。寛永七年七月、數馬の弟源太夫、同藩士河合又五郎に殺さる。數馬仕を致して、其の跡を逐ふこと數年にして遭はず。又右衛門之を坐視するに忍びず、同じく仕を致して相共に仇を復せんとし、終に寛永十一年十一月、伊賀の上野に於て又五郎を打留め、本懐を達せり。世に之を、伊賀越の仇討といふ。

地球

◎摘解

焔 楚浪切、初なり、通じて創に作る。瓦斯體 熱に化合して、氣中に在る氣體。焔 此の字、字書に見えず、然れども、今普通に用ふる故、本書にも之を用ひたり。愚案するに、鎔の字を誤りて、焔に作りたるにはあらざるか、鎔は鑄形なり、銷

なり。又案するに、氷の類のとくるに、溶の字を用ふる故、石のとくるに熔の字を用ひ
始めたるか。皺襞は測救、切面の皺なり。襞は必益、切衣の襞積辨ひが如きなり。
蕩搖蕩は物の萌芽を動かすをいふ。蕩搖は水の動く事。陂滂禾、切表なり、又平
ならざるなり。

◎参照

地球ハ太陽系ト稱スル星群ニ屬スル一遊星ニシテ、十八世紀ノ頃、か
んと及らぶらすニ氏ノ初メテ唱ヘタル霞雲星説ニ據レバ、此星群ハ始メ霞雲星ト
稱スル一團ノ瓦斯塊ニシテ非常ノ高温度ヲ有シ、西ヨリ東ニ向ツテ宇宙間ヲ回轉
セシモノナルガ、其運行中、遠心力ノ爲メニ漸次分離シテ其周圍ニ帶狀ノ環ヲ造リ、
各環又凝集シテ小團トナリ同一ノ方向ニ回轉セリ、此ノ中央ニ存在セル瓦斯團ハ
即チ後ニ太陽トナレルモノニシテ、之ト分離シ其周圍ヲ回轉セル小團ハ即チ遊星
トナリ、吾ガ地球モ亦實ニ其一ニ位スルモノナリ。斯ノ如ク此等ノ遊星ハ其始メ
ハ熾熱セル瓦斯體ニ過ギザリシガ、寒冷ナル空間ヲ運行スルニ際シ、漸次冷却シテ
熔融セル液體トナリ、粘稠ノ度漸ク加ハルニ從ヒテ其表面ニ薄キ膜ヲ生ジ、遂ニ堅
硬ナル皮殼トナルニ至レリ、吾人ハ實ニ今日此皮殼ノ上ニ生活スルモノニシテ之

ヲ稱シテ地殼ト云ヒ、其岩石ヨリ成レルヲ以テ一ニ之ヲ岩石圈ト云フ、山崎直方氏
ノ地文學教科書

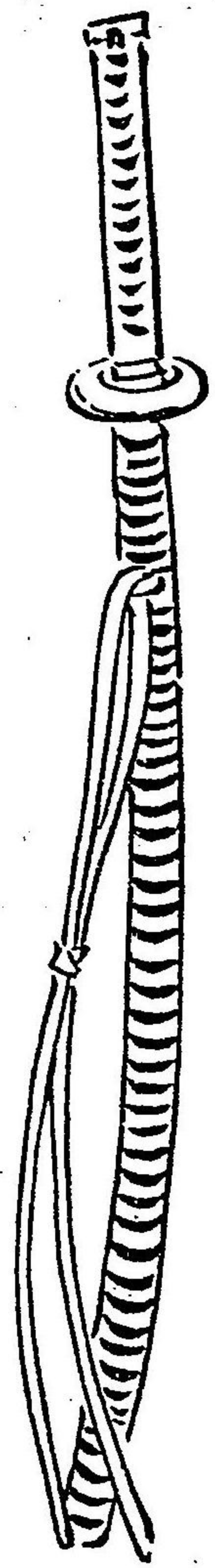
地熱漸次冷却するに従ひ、漸次に地殼の厚さを増し、且つ地球全體の容積を減じ、
中心に向ひて縮小するが故に、此の際地殼を壓迫し、地殼に皺を生ず。其の凹處は太
洋にして、其の凸部は大陸山脈に外ならざるなり。かくの如く地熱の冷却するに従
ひ、今日まで水蒸氣となりて大氣中に在りし水は、冷えて地上に降下し、太平洋海を
湛へ、高所の水は低きに向て流れ始め、地殼上に河流を生ず。河流は土地を削りて地
層を新生し、火山力は屢々激して火山を噴出し、地殼に變動を與ふ。流水水蝕の結果
は、地殼に水成岩を生じ、火山噴出の結果は、地殼上に火成岩の大塊或は厚層を生じ、
地震の結果は、陷落湖を生じ、徐々なる地殼の隆起降下は、桑田を變じて海となし、又
は海底を山頂に持ち來たす。かくの如く地殼上に水陸の區別生じ、其の温度漸く生
物の生活に適するに及ぶや、始めて下等なる生物を生せり。……(棚橋樋口兩氏合
著小學理科教科書外篇)

森蘭丸

◎摘解

款紋クワンモン

刻鞞キツミヤの模様なり。刻鞞は、鞞を幾段にも刻みて、それが鞞の模様



に爲り居るものにて、本賊刻ホンゾクキツ五厘刻等種々あり。暗射アンセキ食亦切シキキ泛而言射則在去聲

以射其物而言則在入聲といふ。即名詞の時は音シヤにて、動詞の時は音セキなり。

賣ウレ作者は欺く意味に用ひたるやうなれども、ちと穩當ならぬやうなり。賣國賣君

等の文字は、かゝる場合には、あてはまらず。愨ケツ苦角切謹なり、善なり、愿なり、誠なり。

瀧澤馬琴

◎摘解

野乗ノノリ乗は載なり、事を書き載する意味より、書物の事を乗といふ。野

乘は、猶野史といふが如し。意匠イセウ慘澹サンタン工夫を凝らして、心を痛むる事。爲所

魚肉イサニク魚肉の如く取扱はれて、殺さるゝをいふ。史記の項羽本紀に、如今人方爲刀俎

我爲魚肉とあり。色然シキゼン顔色を變へる有様。伎心キシン伎は支義、切、害なり、そこなふ

と訓ず。

地震

◎参照

地震ノ原因并ニ其分類 地震ハ地殻ノ急劇ナル震動ニシテ、其原因

ニヨリ之ヲ分ツテ火山地震、陷落地震及斷層地震トナス。

第一、火山地震 火山ノ噴出激甚トナリ若シクハ其破裂ヲ來スニ方リテ四近ノ地

ニ波及スル震動ヲ火山地震ト云ヒ、此種ノ地震ハ其震動比較的強烈ナラズ、從ツテ

又遠距離ニ達スルモノ少ナシ、明治二十一年磐梯山破裂ノ際、隨伴セル地震ノ如キ

ハ、其破裂ノ激烈ナルニ拘ラズ其震動微弱ニシテ山麓ニアル猪苗代町ノ如キ猶、人

家ノ破潰スルニ至ラザリキト云フ。

第二、陷落地震 地下水若シ其循環ノ途中ニ於テ岩鹽、石膏、石灰石等ノ地層ニ會シ、

漸次之ヲ溶解シ去ルトキハ遂ニ地中ニ空洞ヲ生ジ、其上層ニ位セル地盤ハ陷落シ

テ之ガ爲メニ地震ヲ起スモノ是ナリ、すうゐつるニハ此種ノ地震屢起ルコトアレ

ト本邦ニハ未ダ其例ヲ見ズ。

第三、斷層地震 一ニ之ヲ地ニ地震ト云ヒ、地殻ニ斷層ヲ生ズルニヨリテ起ルモノ

ナリ、地球收縮ノ爲メ生ズル所ノ横壓力ハ地殻ニ敏襲ヲ造リ、元來脆弱ナル地殻ハ又從ツテ幾多ノ裂解ヲ生ズベク、地層之ニ沿ヒテ上下ニ移動シ其固有ノ位置ヲ變ズルコトアリ、是レ即チ斷層ノ成生ニシテ所謂地ニリナルモノヲ爲スナリ、地殻此急激ナル變動ニヨリテ地震ヲ起スモノ即チ斷層地震ニシテ前二者ニ比スレバ震動ノ區域モ廣ク、其發作亦頻繁ナリ、本邦ニ於テ日常感ズル所ノ地震ハ概ネ此ノ種ニ屬スルナリ、(山崎直方氏ノ地文學教科書)

米田某

◎摘解 竹牌 竹束といひ、竹を束ねて、楯と爲し、銃丸を防ぐもの。甲乙某といふに同じ。且でさへもと譯す。辭令ことばづかひ。

乳雀

◎摘解 諫然 此の字は、標註に掲げたるが如く、莊子の養生主の庖丁解牛文中に見ゆ。其の意味は、牛が二つになりて、ばさりと倒るゝ聲なれども、こゝでは、落る聲に用ひたるなり。視朝 朝は朝政なり、即諸役人より申し上ぐる政治を視るなり。

◎参照

信綱童名長四郎と申或時に若君大殿の御寢殿の屋の軒端に雀の巢くひ子をうみたりしをこなたより御覽してほしからせ給ひ長四郎取てまいらせよとあり長四郎年十一歳の時なればいかにも叶ふまじき由を辭しければ晝はおとろきて飛去る事も有なん巢くひし所能見置て日くれてこなたの屋の軒にのほりはしきしてのほりかしてに忍ひ行て取べしおとなは身重く足音もしななた、汝取てまいらせよとさふらふ人々のれしへしかは力なく日くれぬればこなたの屋よりしてつたひく行くすてに御寢殿の軒に至てとらんとせしに踏損して御坪の内へとうと落將軍家御刀とつて障子引あけ給へは御臺所燈火とつて出させ給ひ御覽するに長四郎にて有けり將軍家不思議に思召されて汝は何しに爰には來りぬるそと御尋有しにけふの晝此御殿の屋の軒端にすゝめの子うみたるをはるかに見て餘りほしさに取に參りて候と申す將軍いやくおのれか心にはあらし誰か教へけるそといろく、に御推問あれとも幾度もはしめ申せし言葉にかはらずおのれ事の由有の儘に申さすあらそひぬるこそ年頃にも似ぬ不敵なれと仰られて大なる袋の中ををし入て口を御手つから封し給ひ柱にかけさせ給ひ事の

よし有のまゝに申さしらん程はいつ迄も斯て候へと仰けれとも猶あらしむ申事はしめの如し夜すてに明てつねの御座に出させ給ふ御臺所はやく心得させ給ひて彼かいといけなき心にて身のかなしさをかへり見す竹千代君の仰なりと申さる事を深く感したまひ女房達に仰せて朝かれい召て是たうへよとて給りて又御手つから元の如くにぬはせ給ひて置せ給ふ晝の程將軍家入らせ給ひ又御推問有しかと終に言葉をかへす御臺所御詫言ありしかはさらは向後の事をいましむへき由仰て御ゆるしあり將軍家御臺所向け給ひ彼か今の心にて生立たらんに竹千代殿の爲には双なき忠臣にて侍らんものなりと殊の外悦はせ給ひしとなり（藩翰譜）

山行

◎摘解 冠童論語に冠者五六人童子六七人とあり。文字の出處はこゝにあるを以て冠者と童子となれども、泛く子供といふ意味に用ひたるなり。久之解は卷之一蜘蛛の所にあり。詩唐の杜牧の詩なり。坐すぞろにといふに同じ。何故ともなくといふ意。歸貽貽は與之切贈遺なり。歸貽はいへづと、即家へのみ

やげ。博一榮 博は貿易なり、榮は笑ふ貌、一物を以て笑ひと貿易するなり。

捕鯨説

◎摘解 瞻職廉切、仰ぎ視るなり。邪許きやり歌なり。先登第一に銛を中てたるものをいふならん。

鑄工

◎摘解 鬚髯若戟 鬚は相兪切、髯は而占切、師古曰、頤オトガヒに在るを須鬚ヒゲに同じといひ、頰オモテに在るを髯ヒゲといふと、因にいふ、口の上なるを髭ヒゲといふ。音即移、切戟は雙枝あるほこなり。四片金 たゞ四ひらの金といふことにて、金高は分らず。腮オモテ頤の俗字、頤は蘇來切、ほこなり。頤オモテ胡感切、あぎ又はあぎとと訓ず、口中の上下の骨、或は曰く頰車オモテと。

沈默會

◎摘解 崇水於玻璃盃 滿員にして、入るゝ餘地なきを示す。次の蒔薇葉を泛べたるは、入れんと思はゞ、入るゝ餘地あるべしといふ意味を示す。數字云云 最初名簿に100と記しありたるなり。是武100かくの如く記したり。會長1000かくの

如く改めたり。

記鼯鼠

○摘解 鑽隙 鑽は穿なり、隙はすきまを穿ちてはひる意。邀于宵切、ひかふと訓ず。

重盛諫父一

○摘解 院北面 北面の武士なり。院の御所の守護として、召使はるゝ武士の稱、白河院の御時より始まるといふ。覆育 覆は反覆、顛覆の時は、芳福切、蓋ふ時は、敷救切、つとめて、ふといふ。

○参照 銀ノ蛭卷シタル手鋒ノ秘藏ノ常、枕ヲ不放、被立タル、鞆ハツシ左ノ脇ニ挾テ、中門ノ廊ニ被出タリ、其氣色大方アタリヲ撥テ、勇々敷ゾ見エケル。貞能貞能ト召ケレバ、筑前守木蘭地ノ直垂ニ、火威ノ鎧著テ、跪テ候ケリ。入道、嘖聲ニテ宣ケルハ、ヤナレ貞能、儲ニ承シ。入道ガ過分トテハ、官途ノ涯分計也。坂上、田村丸ハ、苅田丸ガ子也。シカ共、東夷ノ邊土ヲ平ゲシ忠ニ依テ、左近、大將ヲ兼タリ。朝敵ヲ誅シテ、高位ニ登ル事、異域本朝其跡相傳レリ。淨海一人ニ非ズ。君強ニ御憤有ベキ事ナラズ。其奉公ヲ

案ズルニ一度一旦ノ勳功ニ非ス。一年保元逆亂ノ時、平馬助ヲ始トシテ、親者共モ半ニ過テ、新院ノ御方ニ參キ、一宮重仁親王ノ御事ハ、故刑部卿殿ノ養君ニテ御座シカバ、旁思放進セガタカリシカドモ、故院ノ御遺誠ニ任テ、御方ニテ前ヲ蒐、凶徒ヲ討平タリキ。是一ノ勳功也。次、平治元年ニ右衛門督信賴、卿下野、守義朝等ガ振舞、入道命ヲ惜テハ、叶フマジカリシナ。命ヲ重シ身輕シテ、凶黨ヲ退キ、經宗惟方ヲ召禁シニ至ルマデ、度々天下ヲ鎮、海内ヲ平ゲテ、君ノ御代ニナシ進タル入道也。タトヒ人イカニ讒申トモ、争カ子々孫々迄モ捨思召ベキ。成親卿讒奏ニツカセ御座テ、一門追討セラルベキ由ノ院中、御結構コソ返々遺恨ノ次第ナレ。此事行綱不告知、不可顯不顯ハ入道安穩ニ有ベシヤ。猶モ北面ノ下臈共ノ中ニ申事ナンド有バ、御輕々ノ君ニテ、一定當家追討ノ院宣被下ヌト覺ユ。朝敵ト成、ナン後ハ悔ニ甲斐有マジ。世ヲ鎮、程仙洞ヲ鳥羽ノ北、御所ヘ移シマヒラスル歟。去ズハ、御幸ヲ是ヘナシ進セバヤト思也。其儀ナラバ北面ノ者共ノ中ニ、矢ヲモ一ツ射出ス者モ有ヌト覺ユルゾ。侍共ニ可有用意ト觸ベシ。大方ハ入道院中ノ宮仕、思切ヌ。キセナガ取出セ、馬ニ鞍置セヨトゾ宣ケル。……主馬判官盛國、此形勢ヲ見テ、穴淺猿ト思ケレバ、小松殿ニ馳參、世ハ既ニカウト見エ

侍リ。……大臣大ニ騷給テ。……急ギ西八條へ被馳參ケリ。其時モ猶今朝ノ姿ニテ。烏帽子直衣ニテ。物具シタル者ヲバ一人モ具シ給ハズ。差入テ見給ヘバ。入道既ニ腹卷ヲ著給ケル上ハ。一門ノ卿上雲客數十人各思々ノ鎧直垂ニ色々ノ鎧著テ。中門ノ廊ニ二行ニ著座セラレタリ。諸國ノ受領ナンドハ。縁ニ居覆テ庭ニモヒシト並居タリ。馬ノ腹帶強シメテ。手綱打係打係。旗竿共引ソバメ。熊手薙鎌。手々ニサハゲ。甲ヲ前ニ置テ。主人アト云ハ。郎等サト出ヘキ體也ケリ。小松大臣ハ引替。烏帽子直衣ニ奴袴ノ稜取サヤメキ被入ケレバ。人々事ノ外ニツ奉見。右大將宗盛出向テ。内府ノ直衣ノ袖ヲ引ヘデ。是程ノ大事出來テ。入道殿既ニ甲冑ヲ被帶候ノ上ハ。御裝束何様ニカ候ベキト宣ケレバ。何事カハ有ベキ。朝家ノ重事ヲコソ大事トハ申セ。此ハ私事也。入道ノ物狂ノ至ル所歟。武具ヲ帶スル事輒ラズ。重盛愁ニ其職ニ居ナガラ。甲冑ヲ著セン事。太不可然。就中近衛大將ハ世ノ重ズル官。他ニ異ナル職也。兵共モ數千騎候之上ハ。云甲斐ナク重盛一人物具シタラバ何程ノ事カハ候ベキ。禮儀ヲ知ヌニ似タリ。夷賊朝家ヲ亂リ。凶徒勝ニ乘テ御方敗レントセン時ハ。タトヒ。丞相ノ位ニ至ルトモ。自禦戰ベシ。而テ敵方モ無其仁モ不知。何ニ向テカ合戰スベキ。沙汰之趣。尤以テ不審也トテ。ヨ

惡氣ニニテ尻目ニ懸テ通ラレケレバ。宗盛卿苦々敷思給ヒ。歸入給ヌ。實ニ理也ケレバ。聞人々皆苦リアヘリ。(源平盛衰記)

重盛諫父ニ

◎摘解 彙于貴切類なり。 駢部田切並なり併なり。 叨土刀切貪なり又

濫なり。

◎參照 内府内へ入給ヘバ。入道見之給テ。臥目ニコソ成給ヘ。例ノ此内府ガ世ヲ

表スル様ニ振舞トテ不意得氣ニハ御座シケレドモ。子ナカラモ追アノ貌ニ物具シテ。相向ハン事面早クヤ被思ケン物具脱置隙モナカリケレバ。障子ヲ少シ引立テ腹卷ノ上ニ薄墨染ノ素絹ノ衣ヲ引懸テ出給タリケルガ。胸板ノ金物ノハツレテ見エケルチカクサント。頗ニ衣ノ頸ヲ引違引違シ給ケレバ引綻バカシテ。イトマキラメキテ見エケリ。入道ハヘラメ體ニテ抑此間ノ事。西光法師ニ委シク相尋ヌレバ成親卿ノ謀叛ハ事ノ枝葉也。實ハ叡慮ヨリ思召立ト承レバ。世ノ鎖ラン程。暫ク法皇ヲ奉迎片邊ニ御幸ナシ進セント存ズ。大方近來イトシモナキ者共ガ近習者シ。下剋上ノ折ヲ待時ヲ伺テ種々ノ事ヲ勸メ申ナル間ニ。御輕々ノ君ニテハ御座係亂國ノ基ヲ

モ思召立ケリ。向後トテモ非可奉打解一天之煩當家ノ大事。一定出來ヌト覺ユ。サレ
バ奉申合バヤト存テ。使者ヲ進タレバ。イカナル遲參候ゾヤト宣ケリ。小松殿ハ弟ノ
右大將宗盛ヨリ上座シ給タリケルガ。檜扇半許リ披仕ヒ給ケルガ。入道ノ言ヲ聞給
ヒ。雙眼ヨリ涙ヲハラク。ト流シ。暫物モ宣ハズ。先興醒テ御座ケレバ。入道又物モイ
ハレズ。一門ノ殿原ナリテ鎮テ音モセズ。庭上ノ軍兵等皆畏テ候ケリ。……内府ヤ、
暫ク在テ。直衣ノ袖ヨリ疊紙ヲ取出シ。落ル涙ヲ推拭被申ケルハ。左右ノ子細ハ暫閣
此御貌見進スルコソ現トモ存シ候ハネ。……先世ニ四恩ト云事アリ。……其中ニ尤
重キハ朝恩也。……情上右ヲ思フニ。御先祖平將軍貞盛ハ。相馬、小次郎將門ヲ被誅タ
リケルモ。勸賞被行事受領ニハ過ザリキ。伊豫、入道賴義ガ貞任宗任ヲ滅シタリケル
モ。イツカ丞相ノ位ニ昇リ不次ノ朝恩ニ預シ。就中此一門ハ。忝ク桓武天皇ノ御苗裔。
葛原親王ノ後胤トハ申ナガラ。中比ヨリハ無下ニ官途モ打下テ。下國ノ受領ヲタニ
モ宥サレズコソ有ケルニ。刑部卿殿、備前守ノ御時鳥羽院ノ御願。徳長壽院造進ノ勸
賞ニ依テ。家ニ久ク絶タリシ。内ノ昇殿ヲ宥サレケル時ハ。萬人屑ヲ反シ侍ケルトコ
ソ傳承候ヘ。去ドモ御身ハ既ニ先祖ニモ未拜任ノ例ヲキカサリシ。大政大臣ヲ極メ

サセ御座上。又大臣ノ大將ニ至レリ。所謂重盛ナド暗愚無才之身ヲ以。蓮府槐門ノ位
ニ至ル加之國郡半ハ一門ノ所領トナリ。田園悉ク一家ノ進止タリ。是レ希代ノ朝恩
ニ候ハズヤ。今此等ノ莫太ノ御恩ヲ忘テ濫ク君ヲ奉傾ラント思召立コト。天照太神。
正八幡宮ノ神慮ニモ。定テ背キ給ベシ。背朝恩者ハ。近ハ百日遠ハ三年ヲスゴサスト
コソ申傳テ侍レ。昨日マデハ人ノ上ニコソ承ツルニ。今日ハ我身ニ係ナントス。其上
日本ハコレ神國也。神ハ非禮ヲ受給ハズ。而ニ君ノ思召立處。道理尤至極セリ。此一門
代々朝敵ヲ平ゲテ。四海ノ逆浪ヲ鎮ル事ハ。無雙ノ勳功ニ似タレ共。面々ノ恩賞ニ於
テハ。傍若無人ト申ベシ。……然而御運ノ盡サルニヨリテ。此事既ニ顯ヌ。被仰含大納
言。又被召置ヌル上ハ。縱君如何ナル事思食立ト云トモ。何ノ恐カ御座ベキ。大納言己
下ノ輩ニ。所當ノ罪科ヲ被行候ハン上ハ。退テ事ノ由ヲ陳ジ申サセ給テ。君ノ御爲ニ
ハ彌奉公ノ忠勤ヲ盡シ。人ノ爲ニハマス。撫育ノ哀憐ヲ致サセ給ハ。佛陀ノ加
護ニ預リ。神明ノ冥慮ニ背ベカラス。神明佛陀ノ感應アラバ。君モナドカ思召直ス御
事モナカルベキ。濫ク法皇ヲ傾進セントノ御計ヒ。方々不可然。重盛ニ於テハ御供仕
ベシトモ存侍ラズ。不以父命辭王命。以王命辭父命。不以家事辭王事。以王事辭家事ト

云本文有り。又君ト臣トナ並親疎ヲ分事ナク。君ニ付奉ルハ忠臣ノ法也。道理ト僻事トナ並ベンニ。爭カ道理ニ付ザラン。是ハ專君ノ御理ニテ御座候ヘバ神明擁護ヲ垂給ラン。サラバ逆臣忽ニ滅亡シ。凶徒即退散ノ。八埏風和ギ。四海浪靜ラン事。掌ヲ返スヨリモ猶速ナルベシ。去バ重盛院中ヲ守護シ進セ侍ハヤトコソ存候ヘ。重盛始ハ六位ニ叙シ。今三公ニ列ルマデ。朝恩ヲ蒙。事家ニ其例ナシ。身ニ於テ過分也。其重キ事ヲ思ヘバ。千顆萬顆ノ珠ニモコエ。其深キ色ヲ論ズレバ。一入再入ノ紅ニモ定テ過タルラシ。然者院中ニ參リ籠リ侍ナン。其儀ナラバ重盛ガ命ニ替身ニ替ラント契ヲ結ベル侍二百餘人ハ相隨ヘテ持テ候ラン。此者共ハ去共重盛ヲバ捨思ハジトコソ存候ヘ。是以テ先例ヲ思ニ。一年セ保元ノ逆亂ノ時。六條判官爲義ハ。新院ノ御方ニ參リ。子息下野守義朝ハ。内裏ニ參テ。父子致合戰。新院ノ御方軍破テ。大炊殿戰場ノ煙ノ底ニ成シカバ。院ハ讚州ヘ下向。左府ハ流矢ニアタリテ失給ヌ。大將軍爲義法師ヲバ。子息義朝承テ。朱雀大路ニ引出シ。首ヲ刎タリシヲコソ。同勅定ノ忝ナサト云ナガラ。惡逆無道ノ至。口惜キ事哉ト存候シガ。正御覽セラレシ事ゾカシ。其二人ノ上ノ様ニ淺増ト悲カリシ事ノ。今日ハ又重盛ガ身ノ上ニ罷成ヌル事ヨト存コソ心憂覺候エ。悲哉君

ノ御爲ニ奉公ノ忠ヲ致サントスレバ。迷廬八萬ノ頂ヨリ猶高キ。父ノ御恩忽ニ忘ナントス。痛哉不孝ノ罪ヲ遁レントスレバ。又朝恩重疊ノ底極ガタシ。君ノ御爲ニ既ニ不忠ノ逆臣トナリヌベシ。雖君不爲君。不可臣以不爲臣。雖父不爲父。不可子以不爲子トイヘリ。云彼云此。進退コハニキハマレリ。思ニ無益ノ次第也。只末代ニ生ヲ受テ。係ル憂目ヲ見ル重盛ガ果報ノ程コソ口惜ケレ。サレバ申請ル處。御承引ナクノ。猶御院參有ベクハ。只今重盛ガ頸ヲ召ルベク候。所詮院中ヲモ守護仕ベカラズ。惡逆ノ咎難遁。又御供ヲモ仕ベカラズ。忠臣ノ儀忽ニ背候。申請ル詮タゞ頸ヲ召ルベキニアリ。唯速ニ頸ヲ食レ候ベシ。人一人ニ被仰付テ。御ツボニ引出サレテ。重盛ガ首ヲ刎ラレン事。安事ニコソ候ヘ。人々是ヲバイカヤ聞給ヤトテ。又直衣ノ袖ヲ絞ツ。泣々被諫申ケリ。是ヲ見給ケル一門ノ人々モ。涙ヲ流シ袖ヲ絞ラヌハナカリケリ。源平盛衰記

重盛諫父三

◎摘解

愆憑

音悚勇勸なり。

急切迫の意。

◎参照

入道ハ口説立ラレテ。テロ泣色ニハ御座ケレドモ。猶ヘラヌ體ニテ。サラ

巴今ハ世ニモイロヒ侍マシ。院參モ思止候ヌ。其上ハ召誠ル者共ナモ。死罪ニモ流罪
 ニモセデコソアラメ。但入道カク計申事モ。全ク身ノ爲ナラズ。淨海年關テ餘命幾ナ
 シ。唯子々孫々末ノ代迄モ。安穩ニヤト存ル計也。其事入望ニ背愚案ノ企ニアラバ。何
 様ニモ御計ヒナルベシト宣テ。内へ被入ケリ。小松殿ハ弟ノ殿原ニ向テ。イカニ加様
 ノヒケウハ結構セラレ候ヅヤ。縦入道殿コソ老邁シ給テアラヌ振舞アリ共。今ハ各
 コソ家門ヲモ治メ惡事ヲモ可被宥申ニ。相副タル御事共候哉ト被仰ケレバ。宗盛己
 下ノ人々苦々敷ソ、ロキテゾ見エ給ケル。内大臣ハ中門ノ廊ニ立出給ヒ、サモ然ベ
 キ侍共ノ并居タリケル所ニテ仰ケルハ。重盛ガ申ツル事共慥ニ承リツルニヤ。去バ
 院參ノ御供ニ出バ重盛ガ頸ノ切ラレンヲ見テ後ニ仕ベシト覺ルハイカニ。……去
 バ人々參レヤトテ。又小松殿ヘゾ被歸ケル。……内大臣ハ。入道猶モ腹惡キ人ナレバ。
 院參ノ事モヤアランズラント思召シケレバ。其惡行ヲ塞ガン爲ト覺シクテ主馬判
 官盛國ヲ使ニテ。重盛コソ別ノ天下ノ大事ヲ聞出シタレ。我ヲ吾ト思ハン者共ハ。急
 ギ參レト被催タリ。是ヲ承ル者共オホロケニテハ騷キ給ハヌ人ノ係ル仰ノ下ルハ
 實ニ別ノ子細ノ有ニコソトテ。難波次郎經遠。妹尾太郎兼康。筑後守家貞。肥後守貞能

等ヲ始トシ。如法夜中ノ事ナレドモ。我先ニトゾ馳參ケル係ケレバ老タルモ若モ留
 ル者ハナシ。小松殿ヘトテ周章テ參ケリ。入道ハ何事ゾ世間ノ物騷ギハ。是ニ候ヤ々
 ヲト宣ケレ共。ソラ聞ズン馳出ケレバ。西八條ニハ青女房老尼。若ハ筆執バカリ殘タ
 ル。少モ弓馬ニ携程ノ者ハ。一人モナカリケリ。……小松殿ニハ。盛國承テ侍ノ著到シ
 ケリ。宗徒ノ侍三千餘人。郎等乘替打具シテ。二萬餘騎トゾ注シタル。内大臣ハ著到披
 見ノ後。家貞貞能ヲ召テ。子細ヲ下知シ給テ西八條へ遺レケリ。二人ノ者共入道殿ニ
 參テ。弓脇ニ挾甲ヲ脱高紐ニ懸テ。庭上ニ候ケリ。入道殿ハ人々ニ捨ラレテ。徒然ノ餘
 ニ猶繼行道シテ御座ケルガ此等ヲ見給テヘラヌ體ニ宣ケルハ。如何ニ家貞貞能ヨ。
 小松殿ニハ軍兵ヲ誘引シ。是ニハ人一人モナシ。所存何事ゾ其意ヲ得ズト宣ヘバ。家
 貞畏テ可有御院參之由。仙洞依被聞召。法皇大ニ驚御座テ。勅定ニ爲治天下。被下軍將
 之宣旨之後。經多年之間。云官位云福祿。秀于先例深可存朝恩之處。還而欲亂國家之條。
 既爲朝敵之上者。速ニ可追討之旨。所被下院宣也。昨日申入シガ如奉。向父弓矢ヲ引事
 ハ有ベカラズトイヘ共。重盛今官居シ。祿ヲ貪ル上ハ。勅定又難奉背。此事聞食レナバ。
 御自害モヤアランズラン。先守護シ進セヨ。重盛角テ侍レバ。御命ヲバ奉公ニ申替侍

ラント被仰下ト申タレバ。入道殿マツ興醒テ俄ニ道心モ失果ツ、實カ虚言カト宣ヘバ。一定ニ候ト申ス。ヨモサラジ入道ヲ矯見トテコソトイハレケレバ。家貞ハ今始テ小松殿、左様ノ輕々敷御事有ベシト不存。院宣トテ軍兵ノ中ニ御披露有シハ一定ノ事ニコソト申時。入道大ニ歎給テイハレケルハ。家貞貞能慥ニ承レ。昨日申シ様ニ。出家入道ノ身也。餘年日數少シ。内府ニ奉讓世ヌル上ハ。向後ハ物ニイロヒ申事アルベカラズ。院宣ノ御返事モヨキ様ニ可被奏聞。兎モ角モ相計ハレンニコソ奉隨ラメト。曳去バトク還リ行テ。此由ヲ申ベシト宣ヘバ。二人ノ者共ハ守護ニ候ベシトノ仰也。別ノ御使ヲ以テ。可被仰ヤ候ラント申。入道ノ仰ニハ。只急歸レ我一人イヅクヘカ落行ヘキ。是ニ不働シテ居ベシナント。様々怠狀被申ケリ。二人歸テ細ニ角ト申セバ。内府ハ打領許涙クミ給テ。ヤチレ家貞貞能ヨマコトニハ勅定ナリトテモ。爭カ父ニ向ヒ奉テ。無道ノ逆罪ヲ犯スベキ。只入道殿違勅ノ振舞ヲ。シツメ奉リ。天下ノ煩ヲ止トノ方便ナリト云ヘドモ。重盛カ、ル惡人ノ子ト生テ。五逆罪ノ一ヲ犯スル事コソ悲ケレ。イカニトイヘバ。子ノ身トシテハ我コソ何度モ父ノ命ニハ隨奉ベキニ。今父ニ向ヒ奉リテ。御心ヲ傷奉リ。御怠狀ヲセサセ奉ル事ノ。心憂サヨトテ。ハラ／＼ト泣

キ給ヘバ二人ノ者共モ鎧ノ袖ヲツマラシケル。其後大臣ハ軍兵等ニ仰ラレケルハ。日比ノ契約タガヘズ。下知ニ隨テ馳參リ聞傳テ參上ノ條。返々神妙聞召ス事アリテ被仰タリツレドモ。其事聞ナシツ僻事ニアリケリ。トク／＼罷歸ベシ。但今度別ノ事ナケレバトテ後々ノ催促ニ悠々存ズベカラズ。ダトヒ事無シト云トモ。何度モ可隨下知也。終ニハ御用ニ叶フベシ。……法皇聞召テ今ニ不始事ト云ナガラ怨ヲバ恩ヲ以テ被報ヌ。返々モ重盛ガ心ノ中コソハツカシケレ。(源平盛衰記)

眞田餘一

◎摘解 夕顏 源平盛衰記に、與一ガ乗タル馬ハ。白茸毛太。逞カ七寸ニ餘テ

鼻ノサキ瓠ノ花ノ如ク白カリケレバ。名ヲバ夕貌ト云東國一ノ強馬也云々とあり。

四韁 同書に、出雲驛ノ大ナルニ。手綱二筋ヨリ合セテゾ乗タリケルとあり。 刀

不脱室 同書に、運ノ極ノ悲サハ。岡部彌次郎ガ首切りケル刀ヲ不拭サヤニ差タレバ。血詰メ拔ザリケリとあり。

忠勇兵士

◎摘解 火口 他より火の漏れ来る穴。 副長 松島艦の副艦長なり。

本多氏絶命詞

◎摘解

中書ナカニガサシヤウ日本の中務省と支那の中書省とは略相似て、忠勝は、中務少輔なれば、中務を漢譯して、中書と爲したるなり。黄童子ワウコウジの事を黄口兒ワウコウジといふは、雀の子の口が黄色なるより、それを借りていひたるものなり。

宇治河先登一

◎摘解

調テウ朽コ正セイ切セツ候カウ何ナニなり。後期カウキ在此期は出立の期なり。源平盛衰記に、一匹持侍リツル馬ハ馳損シヌ。親キ者ト云知音ト申人々面々ニ打立間。誰ニ馬一匹ヲモ尋乞モトメヘシトモ覺エネハ如何仕リ侍ルヘキト。心勞ノ大名小名既ニ上リヌレ共。今マテハ角テ候也ト申云々とあり。

宇治河先登二

◎摘解

時大軍陣于浮島原トキオホイクサノマタクニウキジマノハラニ此の時富士川、雪汁の爲に水嵩増して、急に渡りかねたるを以て、明日瀬踏アシヲフミせさせて、閑に渡すべしとて、浮島が原に陣どりしなり。視シみくらぶる意、不得命賜トクニイフタマヒはる命令を得ず。且カミでさへも。

◎参照

梶原源太ハ磨墨ニ増ル馬モヤ有ラント思ヒテ。大名ノ中ヲ廻テ。馬共

ヲ見ニ。九郎御曹子ノ青海波七寸。蒲御曹子ノ月輪七寸二分。和田小太郎ノ白波七寸五分。畠山ノ秩父鹿毛七寸八分。此等ヲ始トシ。大名小名五十匹。三十匹。五匹。十匹。引セタリ。サレ共磨墨ニ倍ル馬ナシ。源太大キニ悦ウレシ一重アカリタル所ニ居テ。引廻ヒキマ引廻ヒキマ愛シ居タリ。佐々木、四郎高綱ハ生暖ニ黄覆輪ノ鞍置白キ轡フタツヒキリヤ。二引兩ノ手綱結テ。舍人六人付テ。浮島原ヲ西ヘ向テ引セタル。原中宿ヲ過。平々タル春ノ野ナレハ。生暖不斜ナツメチラ勇身振ユウミシノ三聲四聲啼コエタリ。鐘ヲツクガ如ク也ケレハ。遙二里ヲ隔タル。田子ノ浦ヘソ響ヒビクタル。畠山是ヲ聞テ。コハイカニ。生暖カ鳴音ノスルハ。誰人ノ給テ將來タルヤラント云。半澤六郎申ケルハ。是程ノ大勢ノ中ニ。數千匹逸物共多ク侍。何ノ馬ニテカ侍ラシ。大様ノ御事ト覺ヘ候。其上生暖ハ。蒲殿梶原ナトノ被申ケレ共。御免シナシト承ワル。サテハ誰人カ給ヘキトイヘハ。人々ケニモト思ヒテ。アサ咲フテソ有ケル。畠山重忠ハ。一度モ聞損スマシ。人ニタヒタハスハ不知。一定生暖カ音也。只今思合ヨト云フモハテネハ。生暖ハ東ノ方ヨリ。舍人六人ヒキモタメス。白泡カマセテ出來タリ。サテコソ畠山ヲハ。神ニ通シタルヤラントモ申ケレハ。源太ハ磨墨ホメ愛ノ居タル處ヲ。舍人共生暖引テソ通ケル。ユ、シク見エツル磨墨モ。勝ル生暖ニ逢タレハ。無下ニウ

テ、ゾ見エタリケル。源太是ヲ見、蒲御曹子ノ賜ハル歟。九郎御曹子ノ給歟。ヨキ次トテ院へ進セラル、カト思テ。郎等ヲ以テ其御馬ハ何方へ參リ。如何ナル人ノ馬ソト問ス。舍人はハ佐々木殿ノ御馬ト申ス。佐々木殿トハ誰ソ。三郎殿カ四郎殿カト問。四郎殿ノ御馬ト答。源太此事ヲキ、口惜事ニコソ。景季再三所望申ツルニ。御免ナキ馬ヲ。高綱タヒケル事ノ遺恨サヨ。佐々木ニタフ程ナラハ。先ノ所望ニ付テ。景季ニ給ヘシ。景季ニ給ハヌ程ナラハ。後ノ所望也。高綱ニ給ヘカラス。大將軍タル人ノ源平ノ大事ヲ前ニ抱ヘテ。惡モ偏頗シ給ヘリ。是程ノ御氣色ニテハ。イカテモ有ナン。千世ヲ榮ヘキ世中ニ非ス。思ヘハ電光朝露ノ如ク也。イツ死ナンモ同事。日比佐々木ニ宿意ナシ。時ニ取テ日ノ敵也。高綱サル剛者ナレハ。無左右ヨモセラレシ。互ニ引組テ落重リ。腰ノ刀ニテ指違。耻アル侍二人失。鎌倉殿ニ大損トラセ奉ラン。高綱景季二人ハ。一人當千ノ兵ヲヤト思テ。相待處ニ。佐々木争カ角トハ知ルヘキナレハ。十七騎ニテ。サシクツロケテ歩セ來タル。源太ハ最後ト思ヒツ、磨墨ニ乘。太刀モ持ス。刀ハカリソ指タリケル。遙ニ佐々木ニ目ヲ懸テ。眞横ニ歩セ塞。高綱是ヲ見テ郎等共ニ申ケルハ。爰ニ引ヘタルハ。梶原源太ト覺ヘタリ。アノ景氣ヲ見ニ。馬ノ立様人ヲ待様直事トハ覺

ヘス。生暖ユヘニ一定高綱ニ組マント思意趣アルラン。鎌倉殿ノ意セヨトハ。此事ニコソ組テ落ルモノナラハ。指違テソ死ナンスラン。但梶原佐々木公ノ馬ヲ論ノ命ヲステン事。人目實事面目ナシ。陳ノミンニ不叶ノ梶原我ニ組ナラハ。心アレトサ、ヤキテ。打通ントスル處ニ。源太打並テ云ケルハ。如何ニ佐々木殿。遙ニ不奉見參アノ御馬ハ上ヨリ給テカト云懸テ押並フ。高綱ニコト打咲テ申様。實ニ久不奉見參。去年十月ノ比ヨリ近江ニ侍リツルカ。近キニ付テ京へ打ヘカリツレ共。暇申サテハ其恐レ有リ。又何方へ向ヘトノ仰ヲ蒙ラント存テ。三日ニ鎌倉へ馳下ラント打程ニ。只一匹持タリツル馬ハ疲損シヌ。サテハ乗替ナシ。如何スヘキト思煩。御厩ノ馬一匹申預ラハヤト存テ。内々伺キケハ。磨墨ハ御邊ノ賜ハラセ給ケリ。生暖ハ御邊モ蒲殿モ再三御所望有ケレ共。御許シナシト承ル。サテ高綱ナトカ給ラン事難叶。中々申サンモ尾籠也ト存テ。心勞セシ程ニ。由井濱ノ勢汰ニモハツレヌ。サテ又馬ナシトテ留ルヘキ事ニモ非ス。如何セント案スル程ニ。抑是ハ君ノ御大事也。後ノ御勘當ハ左右モアレ。盜テ乘ラント思テ。御厩小平ニ心ヲ入。盜出メ夜ニマキレ。酒勾ノ宿マテ遣シテ。此曉引セタリ。只今ニヤ御使走テ。不思議也ト云御氣色ニヤ預ラント。關心ナシ。若シ御勘

賞モアラン時ハ可然様ニ見參ニ入給ヘトソ陳シタル源太誠ト心得テケニク佐々木殿輒モ盗出シ給ヘリ此定ナラバ景季モ盗ベカリケリ正直ニテハ能馬ハマフクマシカリケリト狂言シテ打連テコソ上リケレ源平盛衰記

宇治河先登三

○摘解 柵 柵は木をまばらにたて、貫をわたしたるもの又は柵と稱して、とりでのことなれども、こゝは亂札逆茂木のこと用ふ源平盛衰記に水ハ長サ増テ底不見其上亂株逆茂木際ナク打テ大綱小綱引張テ流シ懸タレハ鶯鴨ナトノ水鳥モ輒ク、リ通ルヘシ共見サリケリとあり。二十日元曆元年正月廿日なり。廬舎をまつなるいへ。橋架はしげた橋柵の上に横たへて、橋板をさゝふるもの。馬條馬の腹帶。超乗のりこゆる事。

了伯聽平語

○摘解 昨 昨は累日なりともいへば、一夜を隔てたるのみにはあらで、それ以上をもいふならん。不可必 きつと、請合へぬ。 睫まつげ。 見其可樂云云 平語の面白しといふ事にのみ氣がつきて、悲しき所に氣がつかぬ。

降參

○摘解 數莖 莖は戸耕切、數莖は猶數本といふが如し。 曰空論無益 此の日は、こが言葉の端を改めていへるなり、 下拜 此の字左傳に見ゆ、堂を下りて拜する事、但しこゝでは、たゞおじぎする意味に用ひたり。

原田龜太郎畫像記

○摘解 正席聽之 門人の書と雖、其の人は、國事に斃れたるなり、故におすまひを正して聴く。 節齋子曰云云 手紙の文言中に義兵といひ、爲義といひ、充分其の事の義に合ふことを承認し、こゝに至り、わざと論斷を下さざるは、幕府の嫌疑を避くる爲なりけん、當時に在りて、かゝる文章を書くには、勢ひ然らざるを得ざるべし。

義仲戰死一

○摘解 木幡こわたと讀む。 宮垣即築地なり。 業忠驚喜跳下。 匍匐入奏之。源平盛衰記に、業忠嬉シサノ餘、ニ手ノ舞足ノ踏所ヲ忘テ、急下ケル程ニ、惡ク飛テ腰ヲ損ノ。ニカミ入タリケル顔ノ氣色イト、咲シクソ見ケル。蚊々御

前へ參テ。義經ガ申狀具ニ奏聞シ申ケレハ云々とあり。赤錦袍同書に赤地錦直垂ニ萌黃ノ唐綾ヲ疊テ坐紅ニ威タル鎧著テ云々とあり。緋甲同書に赤威鎧ヲ著云々とあり。玄甲同書に黑糸威鎧ハ云々とあり。黄甲同書に三目結ノ直垂ニ小櫻ヲ黄ニ返タル冑ノ裾金物ノ殊ニキラメキテ見ケルハ云々とあり。

義仲戰死二

◎摘解

膂力 膂は脊骨なり、力は脊骨より出づといふ。故に力を膂力といふ。

義仲歎曰云云 源平盛衰記に、首ヲ木曾殿ニ見セ奉レハ、穴無慙ヤ是ハ八箇國ニ聞エシ男。美男ノ剛者ニテ在ツル者ヲ被討ケルコソ無慙ナレ。是モ運盡ヌレハ、汝

ニ討レヌ。義仲モ運盡タレハ、何者ノ手ニ懸。アヘナク犬死センスラン云々とあり。汝淖奴教切泥なり。即深田の事。年三十一 源平盛衰記には、三十七とあり。孰れが是なるかを知らず。

◎參照

木曾殿鎧 張弓杖衝テ。今井ニ宣ケル。日來ハ何ト思ハヌ薄金カナトヤラン重ク覺ル也ト宣ヘハ、兼平何條去事侍ヘキ。日來ニ金モマサラス。別ニ重キ物ヲモ付ス。御年三十七。御身盛也。御方ニ勢ナケレハ臆シ給フニヤ。兼平一人ヲハ餘ノ

者千騎萬騎ト思召候ヘシ。終ニ可死物故ニ。ワルヒレ見エ給フナ。アノ向ノ岡ニ見ユル。一村ノ松ノ下ニ立寄給テ。心閑カニ念佛申テ。御自害候ヘ。其程ハ防矢仕テ。馳御伴申ヘシ。アノ松ノ下ヘハ。廻ラハ三町直ニハ一町ニハヨモ過侍ラシ。急給ヘト泣々涙ヲ押ヘ詢ケレバ。木曾ハ遺ヲ惜ツ、都ニテ如何ニモ成ヘカリツレ共。此マテ落キツルハ。汝ト一所ニテ死ナント也。何迄モ同枕ニ討死セント思也ト宣ヘハ。今井イカニ角ハ宣フソ。君自害シ給ハ、兼平則討死也。是ヲコソ一所ニテ死ヌルトハ申セ。兵ノ剛ナルト申ハ。最後ノ死ヲ申也。サスカ大將軍ノ宣旨ヲ蒙程ノ人。雜人ノ中ニ被打伏テ。首ヲトラレン事心憂カルヘシ。疾々落給ヘテ。御自害アルヘシト勸ケレハ。木曾誠ニト思ヒ向ノ岡松ヲ指テ馳行ケリ。今井ハ木曾ヲ先立テ引返シ、命モ不惜戰ケリ。木曾ハ今井ヲ振捨テ。噉ニ任テ歩セ行。比ハ元暦元年正月廿日ノ事ナレハ。峰ノ白雪深シテ。谷ノ氷モ不解ケリ。向ノ岡ヘ直違ニト志ツラ、ムスヘル田ヲ横ニ打程ニ。深田ニ馬ヲ馳入テ。打共、不行ケリ。馬モ弱リ主モ疲タリケレハ。兎角スレ共甲斐ソナキ。木曾ハ今井ヤツ、クト思ツ、後ヘ見返タリケルヲ。相摸國住人石田小太郎爲久ガ能引テ放ツ矢ニ。内甲ヲ射サセテ。間額ヲ馬ノ頭ニ當テ。俛シニ伏ニケリ。爲久カ

郎等二人馬ヨリ飛下深田ニ入テ。木曾ヲ引落シ。ヤカテ首ヲ取テケル。今井是ヲ見テ。今ノ最後ノ命ナル。急御伴ニ参ラントテ。進出テ申ケルハ。日比ハ音ニモ聞ケン。今ハ目ニモ見ヨ。信濃國住人。中三權頭兼遠カ四男。朝日將軍ノ御乳母子。今井四郎兼平也。鎌倉殿マテモ知召タル兼平ソ。首取テ見参ニ入。ヨヤトテ。數百騎ノ中ニ蒐入テ。散々ニ戰ケレ共。大力ノ剛ノ者成ケレハ。寄テ組者ハナシ。唯開テ遠矢ニノミソ射ケル。去共胃ヨケレハ。裏カカス。アキマナ射ネハ手モ不負。兼平ハ箭ニ貽ル八筋ノ矢ニテ。八騎射落シケル。太刀ヲ拔テ申ケルハ。日本一ノ剛者。主ノ御伴ニ自害スル見習ヤ。東八箇國ノ殿原トテ。太刀ノ鋒口ニクハヘ。馬ヨリ逆ニ落貫テソ死ニケル。兼平自害ノ後ハ。栗津ノ軍モ無リケリ。(源平盛衰記)

阿閉掃部

◎摘解 環甲禮 元服して、始めて鎧をつくる禮。寶鎧をつけてもらふ人。無已 是非にと求めて、已まぬならばといふ意。戎間 戎は兵なり、又兵車の名なり、戎間は猶戰場と云ふが如し。整暇 おちつきて、ゆとりあること。好音讀にすべし。祝ひの酒宴の時に出す引出物。

◎参照

秀康卿越前に封せられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱られけり、又狛伊勢とて、是も國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初させけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧きする事をたのみけり、さて饗膳すみ、いはひの盃に及びしとき、伊勢今日は愚息が鎧の着初にて候ま、御身の御武功の事物語候て彼に御きかせ候へといひしに、掃部いや某が身の上に、御はなし申べき程の武功は覺へ申さず候、されど御望も黙しがたく候ま、某一生の内に武者振の見事なる士を一人見申て候、その事をはなし申べし、江州志津嶽の戰に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引候ひしに、阿閉掃部が父は阿閉淡路守とて、明智に柴田方にて、敵とおぼしくてうしろより詞をかけし故、馬を引返し候へば、其人申候は、今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候、御人體を見うけ幸とこそ存候へ、御不祥ながら御相手になり申へきとてすゝみより候故、それこそなたも望む所にて候へとて、たかひに馬をのりはなし、すてに鎧をあはせんとしけるに、其人しばし御待候へ、今朝より雑兵をおほく突崩し候故鎧よこれて候ま、鎧をあらひ候て御相手になり候はんとて、余吾の湖に鎧を打ひたし、二三遍あらひつゝ、さらはと

て突あひしか、久しく勝負なかりし程に日も暮はて、ものゝあやめも見えずなりぬ、其時あなたより又詞をかけ、もはや鎗先も見えず候、御殘多くは候へども是までにて候、御いとま申候へし、御名こそ承たく候、某は青木新兵衛と申者にて候とて、某か名をも承り候て、此後又た陣頭にて、出合ひ候は、たかひに人手にはかゝり申ましく候、もし又味方にて候は、わりなく入魂いたし候へし、さらはとて立わかれしか、是程見事なる武士はついに見侍らず、いかゝなりはて候にやと語りけるに、其頃伊勢がもとへ、心安く出入する青木方齋といふ浪士あり、其日も來て勝手に居たりしか、此物語をきいて、勝手よりにしりいてつゝ、掃部にむかひ、さても只今の御物がたり承り、今更昔を思ひ、涙をおとしてこそ候へ、其時の御相手になり候青木新兵衛は、はつかしなから我等にて候、かく申はかりにては、うきたる事におほすべく候とて、其時雙方のよろひのおとし馬の毛いろを一々、いひけるか、ひとつもちはさりければ、掃部おとろきつゝ、さてく久しくてあひ候て本望に候とて、手前にありし盃を方齋にさし、是をしるしにとて、腰のわきさしを抜てひきける、それより方齋が名國にたかくなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかは、掃部と同じ祿にてめし出さ

れけるとそ、……(駿臺雜話)

弗蘭克林

◎摘解 誠救 救も亦誠なり。意氣軒昂車の前の高きを軒といひ、昂は

擧なり、故に軒昂は、高くあがる意にて、心持氣風が高ぶる居るを意氣軒昂といふ。

庶下 廊下なり。門 廊下のつき當りの出口なり。他に適當の文字なき故、門の字

を用ひたり。頭昂 頭が高いと注意したるは、つまり屈めといふ意なり。楣 門

の上の横の梁を楣といふ。

◎略傳 ベンジャミン・フランクリンは、合衆國獨立の際、ワシントンと共に國事に盡力して、其の偉績、天下に著る。加之理學者としては、電氣及び避雷柱等の大發明

を爲し、文學者としては、種々の著作を爲し、又徳行家としては、徳行を節制、沈黙、順序、確志、節儉、勤勞、誠實、公義、温和、清潔、沈靜、謙遜の十二門に分ち、之を簿冊に記し置き、日

々之を見て、品行を修めたるが如きは、皆人の知る所にして、實に天下に稀れなる偉人傑士といふべし。

鴨越

◎摘解 三草山 此の頃は丹波の國に屬せしが今は播磨の國なり。

經呼辨慶曰云云 源平盛衰記に大將モ流石始タル山ナレハ武藏坊くト

召辨慶前ニ進出タリ。例ノ大續松用意セハヤト宣フ軍兵等ハ不得其意ケレ共辨慶

ハ用意仕テ候トテ大勢ニ先立テ道ノ邊ノ家々ニ追繼々々火ヲ指ケリ。火焰天ニ輝

テ地ヲ照シケレハ山中三里ハ此光ニテスルリト越ニケリ誠ニ大續松トハ今コソ

人々心エケレ云々とあり。鐵騎強き騎兵。同書に手ニ立ヘキ究竟ノ兵三千餘騎

ヲ撰勝リ云々とあり。顴 ぼ、ぼね、頬の上、目尻の下なる高き骨。山形似鷲

故號鷲尾 尾は峯なり鷲の形に似たる峯といふこと。同書に居所ハ山鼻カ推覆

鷲ノ貌ニ似タリトテ鷲尾ト申付テ候云々とあり。懸崖懸は絶なり、たちきりたる

が如きけはしきかけ。驅鞍馬二下之 源平盛衰記に軍將宣ケルハ一ハ馬ノ

落様ヲモ見。一ハ源平ノ占形ナルヘシトテ。羣毛馬ニ白覆輪白ケレハ。白旗ニ准ヘテ

源氏トシ。鹿毛馬ニ黃覆輪赤ケレハ。赤旗ニナソラヘテ。平氏トテ追下ス。……源氏ノ

馬ハ這起ツ、身振ノ峰ノ方ヲ守。二聲嘶篠草ハミテ立タリ。平家馬ハ身ヲ打損シ臥

テ。再起サリケリ云々とあり。調轡手綱を調ふ。こゝは引きしむる意。風擁擁

は群従なり、風の如くはげしき勢にて、むらがり従ふ意。斷臂滿舟前に乗りたる者、後より乗らんとする者の手を断ち切りたる故なり。

本多三彌

◎摘解 疏豪 さつぱりとして、氣強き事。率直 率は輕率、率爾等の率にて、

輕遽の意味なり。故に率直は、かざりげなく、無造作にて、正直の事。幸若八九郎

能役者の姓名。高館舞 舞の名、高館は、今の陸中の國にて、義經の居たる所。太

公 東照公の事、隠居せし故、太公と稱す。拗 於教、切、戻なり、何かにつけて、ねぢけ

勝重薦子

◎摘解 所司代 禁裏に係る一切の事、及び近畿の民政を掌る役。補昔

は大寶令に規定なき官は、多くは補といひたり。幕府にて、此の例に遵ひたるもの

ならん。

◎參照 所司代 (一室町政府ノ頃、侍所ノ所司ノ其家人ヲシテ代理セシム

ル職名。(二織田氏、豊臣氏、徳川氏ニ至リテハ、其任ズル人、陪臣ナラネドモ、其ノ稱ヲ改

メズシテ、京都ニ置キテ、禁裏ニ係ル一切ノ事、及ビ、近畿ノ民政ヲモ掌ラシムル職ノ稱トナレリ。(言海) 侍所(一)關白家ニテ、侍ノ伺候スル所。(二)鎌倉將軍ノ世ノ役所ノ名、武士ノ職務ナキヲ侍トイヒ、其伺候スル所ナリ、其長ヲ別當トイヒ、守護、地頭、軍役ノ事ヲモ支配ス。(三)室町將軍ノ時ニ至リ、其長ヲ一ノ司、又ハ所司ト稱シ、山名、赤松一色、京極ノ四氏、互ニ代リテ補ス。コレヲ四職トイヒ、刑罰ヲモ掌ル。事アレバ、家臣ヲシテ代理セシム。之ヲ所司代トイフ。(言海)

鐵門破壞

◎摘解 重關關は、くわんのきなり、二重三重にしたるくわんのき。譙樓門の上に高樓を爲り、以て遠きを望むやうになしたるもの。即城門のやぐら。而振切満なり。綿火藥 綿を藥にひたし乾かしたる火藥。燐寸綴導線 燐寸綴導線に着け、火を點じたるなり。下の參照を見よ。颯馳騰は、阜遙切、暴風なり、風の如く疾く馳す。壘粉朝天 壘は壘に同じ、祖雞切、碎なり、朝天は、天外に飛びあがるなり。

◎參照

此決心を爲すと即時に井上、今井、宮地、水越の四人互に眼にて知らせ忽ち起つて、此回は一層迅速に城門に駆け附けたり、幸にして彈丸は誰にも中らざりき。直ちに其門扉に二個の綿火藥を裝置し、兩導火線の端を結付けたり、一二三の掛聲にて水越二等卒は燐寸の火を點じて一齊に驅戻れり、未だ誰も元の位置に復せざる間に轟然と百雷の一時に落つるが如き響と共に左しも堅固なる兩門扉は微塵に飛んで餘勢は楯形の内に在る二個の番所をも打碎けり、ソレと云ふ號令の下に小島大尉の率ゐる第八中隊を具先に呐喊して侵入せり。(北清戰史)

義經襲屋島

◎摘解 義經曰。求進云云源平盛衰記に、判官軍ト云ハ、大將軍カ後ニテ。蒐ヨ責ヨト云タニモ引退ハ、軍兵ノ習ヒナリ云々とあり。野猪而介者耳此の文字、原文の意を失へりとして、學者の常に非難することなるが、いかにも是れにては、猪で甲冑きたる者といふ意にて、意味分らず。源平盛衰記には、梶原大將軍ノ謀ノ能ト申ハ、身ヲ全フノ敵ヲ亡ス。前後ヲカヘリミズ。向フ敵ハカリヲ打取ントテ、後ヲ知ヌヲハ、猪武者トテ、アブナキ事ニテ候。君ハナチ若氣ニテ加様ニハ仰セラレ、ニ

コソト申云々とあり。 **恚** 於避切、又胡桂切、恨なり、恨怒なり。 **伊勢義盛** 云云、義經が船を出さぬならば、射殺せと命じたるが爲なり。 **從者五艦** 義經の船ともに五艦なり。源平盛衰記に、一番判官船、二番畠山カ船、三番土肥次郎船、四番和田小太郎船、五番佐々木四郎船也とあり。 **獨置炬於義經舟** 本船の目印の爲、且は敵に船の數を見せじとの爲なり。 **我馬足瑟縮** 云云、同書に、船ニユテレテ、立スグミタル馬共也。左右ナク下シテ誤チスナ。沖ヨリ追下ノ船ニ付テ、遊セヨ。馬ノ足トツカハ、船ヨリ鞍ヲ置ヘシ。其間ニ鎧物具取付テ、船ヨリ馬ニハ乗移レ云々とあり。 **勝浦** 同書に、文字ニハ勝浦ト書テ候ナルヲ。下藤ハ申安キニ付テ、カツラと呼侍キとあり。 **京人也** 同書に、中山路ノ道ノ末ニ、賢ノ直垂ニ、立烏帽子。立文持テ足ハヤニ行。下種男アリ。京家ノ者ト見ユとあり。

採草記

◎摘解 **蓋** 車の蓋、即車の上に掩ふ蓋。 **錯落** まじる。 **參差** 參は楚簪切、差は楚宜切、參差は齊しからざる貌。 **諷意** 標註に掲げたる躁進、徒爲耳といふは、小學外篇の范魯公賈が、兄の子杲を曉したる詩の末句なり。

堀川夜襲

◎摘解 **昌俊** 土佐坊昌俊。 **七大寺** 南都の東大、興福、西大、元興、大安、藥師、法隆の七大寺。 **呵** 眠見切、褻視なり。 **兒玉黨** 武藏ノ兒玉一族を兒玉黨といふ。 **北走** 此の北は、敗北の北にはあらで、きたなるべし。何となれば、前に昌俊敗走とあれば、こゝで再びにげ走るとしては、重複すればなり。且盛衰記にも北山ヲ指テ落ケルカ云々ともあれば、多分きたの意なるべし。

大久保彦左衛門

◎摘解 **風** 諷に同じ。遠まはしにいふ。 **列在朝** 列は、位列なり、今にても、其の位列、幕府の中に在りて、全くの隠居にはあらずといふ意。 **貨** 金錢を貨といふ。併して、にては、珍奇の字に代用したるものと見ゆ。 **蔓菁** かぶら、略してかぶといふ。但し事實は大根にて、文字の用ひ方を誤りたるならん。大根の漢字は、蘿蔔なり。 **不腴圃菜** つまらぬ畑の野菜。 **苞苴** 賄賂の品を苞苴といへども、こゝは、たゞこもづゝみといふ事。 **階** 本來は、きざはしなれども、こゝは、玄關の式臺、玄關の板敷の事をいひたるなり。 **狼藉** 亂脈の事、狼が草を藉きて臥したる跡は、草が亂脈

になり居る故物の亂脈なるさまを狼藉といふ。 謁者取次人。 公堂役所。

正成守千窟

○摘解 東北三道 東海、東山、北陸の三道。 大臣 貞藤は、政所の執事なり

しかば、大臣と書きたるならん。貞藤、剃髪して、道繼といふ、即二階堂出羽、入道道繼是

れなり。 宰 長崎高資は、内管領にて、高時の後見職となり、北條の家政を主宰せし

故、宰と書きたるならん。 監軍奉行。 五泉 太平記に、五所ノ秘水トテ、峰通ル山

伏ノ秘ノ汲水此峰ニ有テ、滴ル事一夜ニ五斛計也云々とあり。 機 龍吐水の類。 容

底ニ赤土ヲ沈メテ、水ノ性ヲ損ゼヌ様ニシテ、捨ケル。とあり。 機 龍吐水の類。 容

可なり。 名越 名越越前守。 柵守 柵をたて、守るは、水を汲ませぬ爲なり。 奪

其幟云云 太平記に、旗大幕ナンド取持セテ、楠カ勢開ニ城中ヘソ引入ケル。其翌

日城ノ大手ニ、三本唐笠ノ紋書タル旗ト。同キ文ノ幕トヲ引テ云々とあり。 築長

圍 陣小屋を建て、長く取圍みて、兵糧攻にすること。 卿 子力切。

○摘解 官幣大社 官にて祭る大社。社格には、官幣大社、中社、國幣中社、小社、

修學旅行

別格官幣社あり、官幣とは、元と祭りの日に、神祇官より幣物を供ふる故に、此の名あり

りたるものにて、今にても其の稱を用ふ。 拔海 海面より抜け出づること。山の高

さは、海面より測算す。 歴歴 行列の貌、又明なる貌。 下春 春は書容切、下春は、太

陽、山に入らんとして、白つくが如く見ゆるをいふ。

○附記 本文も送假名も、生徒が先生に對する敬語を用ひたり。生徒は、動もすれ

ば、長上に對し、敬意を表する事を忘る、故にかく記したり。生徒の作文にも、此の筆法

を用ひさせし。

富士山

○大意 起承の二句は、對句を以て、富士山が、通常の山にはあらで、仙人も來遊し、

神龍も棲息する靈山なる事をいひ、轉結の二句は、詩經の比の體にて、物に形容した

るなり。其の意は、雪は、純素、即白のねりぎぬの如く、又其の上になびく烟は、柄の如

くにて、恰も白扇を倒に東海の天に掛けたるに似たりといふなり。此の詩は、有名な

る故、載せられたれども、實は轉結の二句、いかゞと思ふ。柄とは何の事なるか、多分扇の地

紙を除きて竹骨の處を總體にいひたるならん。又支那にて扇といふは、大概團扇の

事にて、其の形丸し。故に此の白扇は、日本の扇なるべし。それにては、支那人が見ては、解しがたからん。之を要するに、前の二句の割合には、後の二句規模も亦小なりと思ふが、いかゞのものにや。

獅識奴

◎摘解 飼獅 當時羅馬の法律として、奴隸が逃脱を謀りて、捕へらるゝ時は、獅と格闘せしむる定めなりき。其の時には、豫て獅を餓ゑさせて、人を見れば、直にかゝるやうに爲し置きたりとぞ。疾視 にくみ視る。錯記 あやまり覺ゆ、即見忘れたる事。邂逅 思はずめぐりあふ。躡足 のうら。棘芒 ばらのとげ。馴 詳選、切順なり、従なり。

狩虎記

◎摘解 勒隊 勒は盧則、切抑なり、勒隊は勢ぞろへなり。蜚騰 蜚は匪微、切飛と通ず、蜚騰は、とびあがるなり。帖佐 俗にちうさといふよし。暴虎 虎を手うちにする。馮河 河をかわれたりす。敵愾 敵はあたること、愾は恨み怒ること、此の字は敵王所愾といふ句を略したるものいふころは、王が怒り恨む所の者にあたりて、王の爲に忠を盡すなり。立懦振怠 他の懦弱の者を引立て、怠惰の者を振ひ起す。千古 千年の昔より今日までといふ意。

◎參照 子謂顏淵曰。用之則行。舍之則藏。惟我與爾有是夫。子路曰。子行三軍。則誰與。子曰。暴虎馮河。死而無悔者。吾不與也。必也臨事而懼。好謀而成者也。論語述而篇。

叔于田。乘乘馬。執轡如組。兩驂如舞。叔在薺。火烈具舉。禮褻暴虎。獻于公所。將叔無狃。戒其傷女。詩義鄭風。

烏居元忠守伏見城

◎摘解 踊躍 踊は余隴、切躍は以灼、切踊躍は、こをどりなり、悦び勇む有様。上林 帳下 幕下 又は旗本と云ふに同じ。雜賀 馘 古獲切、此の字、耳を截るなりともいひ、又首を斷るなりともいふ。こゝでは、首を斷るなり。

◎略傳 烏居元忠は、彦右衛門と稱す、參河の人、家康公に仕へ、屢戰功あり、天正三年、長篠の戰に、銃に中りて、股を傷つけ、遂に跛となる、然れども、壯武尙衰へず、伏見城破るゝに及び、雜賀の人鈴木重次(通稱を孫市といふか)僱屍を諭えて進む、元忠時に正階に踞し、重次の名を問ひ、徐に曰く、我れは彦右衛門なり、來りて我が首を取れと。

重次曰く、臣は微者なり、敢て敵せざるなり、然れども事既に此に至る、請ふ自殺せよと。元忠領して廣殿に入る、重次扶けて、甲を解く、元忠劔に伏して死す。重次首を裹みて出づ、大阪の軍、之を京橋口に梟す、京師の賈人佐野四郎右衛門といふもの、元忠の首を窺みて之を知恩院中の長源院に葬る。

送正木生遊學東京序

◎題意 序は緒なり、字も亦叙に作る。其の善く事理を叙して、次第序あること、絲の緒の如きをいふ。

◎摘解 青衿 衿は居吟、切衣の領なり、詩經の鄭風に青青子衿とあり。少年書生は、青き色の衿の衣服を著する故、若き書生の事を青衿といふ。

汎瀾望洋 汎瀾は、猶渺漫の如く、望洋は海洋の際涯なきを望む意。故に漠然として學に一定のきまりなきを汎瀾望洋といはひたるなり。等儕儕は士皆切、等輩なり。

◎参照 孟子謂戴不勝曰、子欲子之王之善與、我明告子、有楚大夫於此、欲其子之齊語也、則使齊人傳諸、使楚人傳諸、曰、使齊人傳之、曰、一齊人傳之、衆楚人咻之、雖日撻而求其齊也、不可得矣、引而置之莊嶽之間數年、雖日撻而求其楚、亦不可得矣、子謂薛居州善

士也、使之居於王所、在於王所者、長幼與尊、皆薛居州也、王誰與爲不善、在王所者、長幼與尊、皆非薛居州也、王誰與爲善、一薛居州、獨如宋王何、(孟子滕文公章句下)

馬之演技

◎摘解 暗令默使 馬が演ずる諸藝は、皆人語を解するやうに見ゆれども、實は暗令默使する所あるなり、但しこゝでは、其の秘傳を説明せず、たゞ無言で命令し、技を演せしむとのみ教へ置くべし。

獎揚一番 是れは前藝で御座いますといふ意。 奏主技 いよく本藝に取掛りますといふ意。

◎附記 一通り教授の終りたる後、此の馬が、どうして、かく人語を解するかを問ふべし。恐らくは、答ふる者一人もあらざるべし。生徒のみならず、失禮ながら教師諸君にも容易には答へられませじ。併しながら、其の秘傳を明かせば、なんでもなき事なり。先づ諳算をいはんに、此の馬は、平生よく馴らして、馬師が馬のそばへ寄れば、すぐに地を打ち、そばを去れば、すぐに止むるやうに仕込むなり。此の仕込方、随分むづかしかるべけれども、馴らせば、出来るものと見ゆ。かくして、看客に數をいはしめ、馬師

自ら諸算して、馬のそばに寄れば、馬が地を打つ。諸算の答數だけ打たせて、すぐにそばを立去れば、馬は打つことを止む。そこでいくつと答ふる故、恰も馬が諸算したるかのやうに見ゆるなり。機板を踏む事も此の傳で爲し得らるゝなり。然らば、かぶりを掉ると、うなづくとは、いかにするかといふに、是れも平生よく仕込みて、針にて耳をさしては、かぶりを掉らせ、鼻をさしては、うなづかせ、かくして馴らす時は、仕舞には、さゝすとも耳のそばへ寄れば、かぶりを掉り、鼻先へ行けば、うなづくやうになるとぞ。かく馴らし置きて、「公子か、令嬢か」と問ひつゝ、其の位置を變ずれば、馬はうなづきもし、かぶりを掉るなりとぞ。此の暗令默使、一つ間違つたならば、大笑ひなるべし。然れども、それで飯を食ふ馬師なれば、そこは巧なるものと見ゆ。以上説明せられなば、生徒は、頗る興味を感ずるならん。

湊川之戰

◎摘解 清忠坊門、宰相清忠。王師有天命。太平記に、只聖運ノ天ニ叶

ヘル故也とあり。謂正季曰云云同書に、正成座上ニ居ツツ。舍弟ノ正季ニ向テ。抑最期ノ一念ニ依テ。善惡ノ生ヲ引トイヘリ。九界ノ間ニ何カ御邊ノ願ナルト問

ケレハ。正季カラノト打笑テ七生マテ只同シ人間ニ生レテ。朝敵ヲ滅サハヤトコソ存候ヘト申ケレバ。正成ヨニ嬉シゲナル氣色ニテ。罪業深キ惡念ナレ共。我モ加様ニ思フ也イザサラハ同ク生ヲ替テ。此、本懷ヲ達セント契テ。兄弟共ニ差違テ。同枕ニ臥ニケリとあり。佛家の説に、天道界、人間界、地獄界などの九つの世界ありて、之を九界といふ。

◎参照 正成此上ハサノミ異議ヲ申ニ不及トテ。五月十六日ニ都ヲ立テ五百餘

騎ニテ兵庫ヘツ下ケル。正成此ヲ最期ノ合戦ト思ケレハ。嫡子正行ガ今年十一歳ニテ供シタリケルヲ。思フ様有トテ。櫻井ノ宿ヨリ河内ヘ返シ遣ストテ。庭訓ヲ殘シケルハ。獅子子ヲ産テ三日ヲ經ル時。數千丈ノ石壁ヨリ是ヲ擲。其子獅子ノ機分アレバ。教ヘザルニ中ヨリ駈返リテ。死スル事ヲ得ズトイヘリ。況ヤ汝已ニ十歳ニ餘リヌ。一言耳ニ留ラハ。我、教誡ニ違フ事ナカレ。今度ノ合戦天下ノ安否ト思フ間。今生ニテ汝カ顔ヲ見ン事。是ヲ限リト思フ也。正成已ニ討死スト聞ナバ。天下ハ必ス將軍ノ代ニ成ヌト心得ヘシ。然リト云共。一旦ノ身命ヲ助ラン爲ニ。多年ノ忠烈ヲ失テ。降人ニ出ル事有ベカラズ。一族若黨ノ一人モ死殘テアラン程ハ。金剛山ノ邊ニ引籠テ。敵寄來ラ

バ命ヲ養由ガ矢サキニ懸テ。義ヲ紀信カ忠ニ比スヘシ。是ソ汝カ第一ノ孝行ナラン
スルト泣々申含メテ。各東西へ別レニケリ。(太平記)

題楠公訣子圖

◎摘解 海甸 孔德璋の北山移文に、張英風於海甸。馳妙譽於浙右。とありて、張
銑の註に、海甸言所理邑近海而在浙江之右也とあり。甸は王畿なり、海甸は、王畿の海
邊といふ事、この海甸は、楠公血戰の地、攝津の西宮より兵庫邊に至る一帯の地方
を指したるものなるべし。腔 苦江、切、内空しきなり、今の生理學にては、胸腔、腹腔
などいひて、腸胃などを入るゝ空竇をいふ。こゝでは、腹と同じ意味に用ひたり。

◎講解 起句は、楠公戰歿後の風色をいふ、即西宮、兵庫邊に吹き渡るくもりたる
風、其の中に陰々たる殺氣を含む。は、草木までが、戰血に染まり居れば、皆腥しとなり。
承句は、公の名譽をいふ。即楠公は、かくの如く一死を以て、君に報いたる故、後世に至
り、歴史上其の事蹟を特筆せられて、公の姓名は、千載の後に至るまで、天下に聞えて
馨しとなり。前に腥しといひ、こゝで馨しといひ、相對して、其の名譽の高きをいふ。轉
結の二句は、自分一身のみならず、子供たちまで國家の難に殉死せしめたる事をい

ふ。即自分は、一身を捨て、君に報いたるが、尙君を思ふ熱血の餘りのしたゝりを殘
し置きて、之を子供等に分け與へ、それを賊庭にそゝがせたりとなり。此の詩の如き
は、諷詠の際、忠君愛國の精神を養ふ上に就きて、頗る効益あるべし。

熊本廉士

◎摘解 蓮座 蓮華の形にて、佛像の座して居るもの。鏘 七羊切、又初耕切
にて、玉の聲なれども、こゝにては、小判の音に用ひたり。典 買入なり。坊長 坊
は邑里の名にて、まちの事なれば、坊長は、名主の漢譯に適當すべし。然れども、こゝに
ては、大屋又は家主の字にはめたるならん。鑒識めき。

太田南畝

◎摘解 覃 徒含切。嫗 衣遇切、母なり。質 慤朴魯 慤は苦角切、愿なり、誠
なり、魯は鈍なり、質朴律義にて、愚なる事。横逸 横は縦横自在の横逸は秀逸、故に
ほしいまゝにひひ廻して、すぐれたる意。且 まあ。報單 知らせの書付。文辭
洒落 文章がしやれて居る。錢 昔錢何文といひたる文を錢の字に改めたるも
のなるべし。今の錢と間違はぬやう教へられたし。今の一厘の孔あき錢が、昔の一文

にて、それが百ならば丁百九十六ならば九六百といひき。逸助亦此の亦解しにくし。多分前の獲十餘金に對し、こんども亦の意なるべし。併し又の字の方、穩當のやうに思はる。謁名刺なり。造屐匠下駄屋、屐は奇逆切、木屐なり。

◎附記 蜀山人の狂歌の中にて、風教に害なきものは、之を生徒に知らしむるも差支あらざるべし。

土左衛門(溺死人の異名)を見て、
なむあみだぶつと浮たり沈んだりどこの人やらみづしらぬ人
ある時、一小星、月を犯し、かば、亂の起る前兆なりとて、人々氣にかくるを聞きて、

月の中に一點ぼしの入りぬれば、目出度御代の目の字なりけり
訪はるゝ人の多きをうるさく思ひ、門前に貼り札して、かくなん、
世の中に人の來るころうるさけれとはいふものゝお前ではなし
かるといふ女、通りがゝりの足輕に水をはねかけたりとて、足輕の怒れるを見て、

ゆきかゝる來かゝる水がはねかゝる足輕いかるかるかなしがる

圓山應舉

◎摘解 主水 穴太 俗にあなをといふ。石田友汀此の文には、友とあれ共、實は幽の誤りなるべし。友汀は、幽汀の子にして、應舉の先生は、幽汀なり。嶄然見頭角、嶄然は、山の高峻の貌、いふは人並に勝れて居るといふ事。造化猶自然といふが如し。粉本畫の草案。別開生面別に一派を始む。剗備剗は切なり、きつぱりとよくあてはまり、備はる事。宗工第一等の畫工。眎古文の視の字、しめすと訓ず。頸毛猪の怒毛と稱す。閱歴なり。模本粉本に同じ。鷹於陵切。巨擘擘は博厄切、巨擘は、大指なり、故に第一のものゝ意味と爲る。

四條畷之戰一

◎摘解 義故 義を重んずるふるき家來。餘燼うちもらされ、燼はもえのこりといふ文字なれば、うちもらされの意となるなり。羸弱ひよわき事。有待之身 有待は、佛語にて、無常の意味、有待の身とは、今日ありて、明日なき果敢なる。

き身といふこと。秋トキ秋は穀物の出来上る時にて、四季の中、最も大切なる時なれば、大切の時といふ時に、秋の字を用ふ。

◎参照 楠帶刀正行舍弟正時一族打連テ。十二月廿七日芳野ノ皇居ニ參シ。四條中納言隆資ヲ以テ申ケルハ。父正成庇弱ノ身ヲ以テ。大敵ノ威ヲ碎クズキ。先朝ノ震襟ヲ休メ進セ候シ後。天下無程亂レテ。逆臣西國ヨリ責上リ候間。危ヲ見テ命ヲ致ス處。兼テ思定候ケル歟ニ依テ。遂ニ攝州湊河ニシテ討死仕候了。其時正行十三歳ニ罷成候シテ合戦ノ場ヘハ伴ハデ。河内ヘ歸シ死殘候ハズル一族ヲ扶持シ。朝敵ヲ亡シ君ヲ御代ニ即進セヨト申置テ死テ候。然ニ正行正時己壯年ニ及候ヌ。此度我ト手ヲ碎クズキ合戦仕候ハスハ。且ハ亡父ノ申シ、遺言ニ違ヒ。且ツ武略ノ無云甲斐誇リニ可落覺候。有待ノ身思フニ任セヌ習ニテ。病ニ犯サレ早世仕事候ナバ。只君ノ御爲ニハ不忠ノ身ト成。父ノ爲ニハ不孝ノ子ト可成ニテ候間。今度師直師泰ニ懸合。身命ヲ盡シ合戦仕テ。彼等ガ頭ヲ正行ガ手ニ懸テ取候歟。正行正時カ首ヲ彼等ニ被取候カ。其二ノ中ニ戦ノ雌雄ヲ可決ニテ候ヘバ。今生ニテ今一度君ノ龍顏ヲ奉拜爲ニ參内仕テ候ト申シモ。敢ス。涙ヲ鎧ノ袖ニカケテ。義心其氣色ニ顯レケレバ。傳奏未奏セサル先ニ。

マツ直衣ノ袖ヲツヌラサレケル。主上則南殿ノ御簾ヲ高ク捲セテ。玉顔殊ニ麗ク諸率ヲ照臨有テ。正行ヲ近ク召テ。以前兩度ノ戦ニ勝ツ事ヲ得テ。敵軍ニ氣ヲ屈セシム。叡慮先憤ヲ慰スル條。累代ノ武功返々モ神妙也。大敵今勢ヲ盡シテ向フナレバ。今度ノ合戦天下ノ安否タルヘシ。進退當度反化應機事ハ。勇士ノ心トスル處ナレハ。今度ノ合戦手ヲ下スベキニ非ストイヘ共。可進知テ進ムハ時ヲ爲不失也。可退見テ退ハ。爲全後也。朕以汝股肱トス。慎テ命ヲ可全ト被仰出ケレハ。正行頭ヲ地ニ著テ。兎角ノ勅答ニ不及。只是ヲ最期ノ參内也ト思定テ退出ス。正行正時。和田新發意。舍弟新兵衛。同紀六左衛門子息二人。野田四郎子息二人。楠將監。西河子息關地良圓以下。今度ノ軍ニ一足モ不引一處ニテ討死セント約束シタリケル兵。百四十三人。先皇ノ御廟ニ參テ。今度ノ軍難義ナラハ。討死仕ヘキ暇ヲ申テ。如意輪堂ノ壁板ニ各名字ヲ過去帳ニ書連テ。其奥ニ返ラジト兼テ思ヘハ。梓弓。ナキ數ニイル名ヲゾトマムルト一首ノ歌ヲ書留メ。逆修ノ爲ト覺敷テ。各鬢髮ヲ切テ。佛殿ニ投入。其日吉野ヲ打出テ敵陣ヘトソ向ケル(太平記)

四條畷之戰二

◎摘解 綴引止むる事、即敵を動かさぬやうにする事なり。太平記に、四條、中納言隆資卿大將トシテ、和泉紀伊國ノ野伏ニ萬餘人引具メ。色々ノ旗ヲ手ニ差上。飯盛山ニゾ向ヒ合フ。是ハ大旗小旗兩一揆ヲ籠ヘテ、サデ、楠ヲ四條繩手ヘ寄サセン爲ノ謀也云々とあり。賴章 踞隴而餉云云。隴は壘に通ず。壘は田中の高處なり。太平記にトアル田ノ畔ニ後ヲ差宛テ胡籠ニ差タル竹葉取出シテ。心開ニ兵糧仕ヒ機ヲ助テソ並居タル。是程ニ思切タル敵ヲ取籠テ討ントセハ。御方ノ兵若干亡ヌヘシ。只後ロチアケテ。チチハ落セトテ。數萬騎ノ兵皆一處ニ打寄テ。取巻體ヲハ見セサリケリ。とあり。披靡 なびく、恐れてひらきふすこと。自斷袖云云 太平記に、乍去餘ニ剛ニミヘツルカヤサシサニ。自餘ノ首共ニハ混スマジキゾトテ。著タル小袖ノ片袖ヲ引切テ。此首ヲ押裏テ。岸ノ上ニゾ指置タルとあり。袖は正行の鎧下著の袖なるか。正朝 和田新兵衛正朝。大日本史の註に、異本太平記に、或は正高、高家、時宗、宗秀、行忠に作ると見ゆ。蝟 はりねづみ、脊中一面に針の如き毛ある獸。和田賢秀 幼にして雞髮し、新發意と稱す、正朝の兄。湯淺 湯淺本宮太郎

左衛門。

楠左衛門尉誓塚碑

◎題意 支那に於ては、古は宮室に碑ありて、日影を識し、早晚を知ると。又古は宗廟に碑を立て、牲を繫ぐと。故に初めは日影を識し、牲を繫ぐ用を爲したるが、後人、其の上に功德を紀せしより、遂に神廟の碑、古跡の碑、墓道の碑等あるに至れり。

◎摘解 談山 大和に在り、多武峰が本名にて、たむをだんと讀み、談の字を用ひたり。山上に鎌足公を祀れる神社あり、之を談山神社と稱す。規模 社のかまへをいふ。宏敞 高土を平治し、以て遠望すべきを敞といふ。即大きくして、打開けはれぐしたるをいふ。寒烟 物淋しき烟。低回 たちもとほる事、即何か物に感じて、一つ所を往き戻りする事。潛然 さめぐと涙を落す貌。大慙 大なるわるもの、蘇我の入鹿を指す。廟食 おたまやにて、祀られ、供物をたべ居るといふ事。即長く祭祀のつゞく事。綱常 三綱君臣、父子、夫婦、五常仁義禮智信なり。宵 宵は夜なり、肝は晩なり、天下事多きが爲、天子が夜の未だあけぬ中から、御衣を召し、日が晩れて、漸く御食事あそばす事なり。監物 紀元元年。

芳野懷古

◎大意 吉野の如意輪寺の境内に後醍醐天皇の御陵及び一二親王方の御墓あり。この古陵は、主として後醍醐天皇の御陵を指せるならん。其の古陵は、松柏鬱然として聳え、天籟即天外に吹渡る風に吹かれて、物淋しき聲を發す。されば、此の山寺に春を尋ね見るに、甚だ寂寥にして、訪ひ來る人もなし。たゞ一人眉雪の老僧が、そこらあたり掃除して居たる筈をとめて、落花深き處に南朝の故事を説き聞かすといふ。此の結句、餘情を含みて、得もいはれぬ趣あり。

巨盃一

◎摘解 好飲 此の二字、全篇の字眼なり。陪客 お相伴の客。僕從 後段の伏線なり。一斗支那の升目は、我が國の十分一に當る。闕門下の横木、即しきみの事なり。但しこゝでは、坐敷の敷居の事に用ふ。髀 補委、切股なり。

巨盃二

◎摘解 下物 酒の肴を下物といふ。即其の味旨くして、酒を腹に下す物といふ意なり。僻陬 片田舎。齒此劍 此の劍で汝のよはひを斷つぞといふ意。

臣欲無言云云 私はいふまいと思ひます、いへば身の恥をさらす譯ですから。併しいはざれば、あなたといひ分が立たぬ故、あなたを辱むる事にあたる。それ故に、いつそ身の恥をさらしても、私の素性をお話いたしませうといふ意。蜂擁 擁は群從なり、蜂の如くむらがりて、從ふ事。紛拏 拏は女加切、牽なり、攪なり、紛拏は、みだれて、打合ひ、組合ふ事。十八條筋頭形 十八本の筋の入らる頭形のかぶと。朱甲 井伊の赤備とて、君臣皆赤甲を被り、最も名高きものなり。

忘却先生傳

◎摘解 夾袋 紙入。乞假 金を借る。橐 他各切、底なくして紐にてくる囊を橐といふ。但しこゝでは、財布の事に用ふ。塵甑 甑はこしきといひ、蒸籠なり。塵だらけのこしきといふは、用ひぬ爲にて、即貧窮の意なり。罄室 罄は苦定、切盡なり、罄室は、一物もなき空室といふ事にて、是も貧窮の意なり。又左傳の僖公二十六年に、室如縣罄とありて、縣は懸なり、罄は罄なり、室屋發撤し、楸ありて、覆なきこと罄を懸けたるが如しとの説あり。是も亦通ず。窘 渠隕、切窮迫なり。急なり、困なり。虺 許偉、切、蛟虺は、まむし、大虺は、をろち、水虺は、みづへびなり。瀟灑 間雅 さつ

ぱりとして風雅。呈文手紙の文なれども、こゝでは儀式だちたる書付の意なるべし。刺謁名札。

山田長正傳一

◎摘解 礪落 心大きくして、物に頓着せぬ氣風。雄傑自喜英雄豪傑を以て自ら許し、自ら喜ぶ。干侯伯 干は、求なり、大名に用ひられんことを求む。下海 海を下りて、外國へ行く事。船間 船の間といひ、船の中央の處。叢爾 小き貌。鑿鑿 則落切、鮮明の貌。海濫 うみぎは。衷 中に取圍む。送款 款は誠なり、我がまごゝろを敵に通ずる事。即内通ずる事。匹皮留 讀方詳ならず。庵普良 同上。

山田長正傳二

◎摘解 交椅 椅子の交叉すべきもの、即たゝめる椅子の事ならん。供御 衣服など凡ての供へ物。便服 平服、禮服に對して、いふ事。貽 丑吏、切、視ること移らざるなり、又驚き視る貌。發跡 出世。塵埃中 ちりほこりの中とは、穢らはしき世の中といふ事にて、次の寥廓といふ事に對していふ。寥廓 おほぞら、寥

廓の上に致すとは、天上したといふ程の意味にて、大層出世したる事。商旅 旅は衆なり、商人の多くがといふ事。淺間 扁額なり。報賽 お禮まひり。方物産物。阿因 讀方詳ならず。

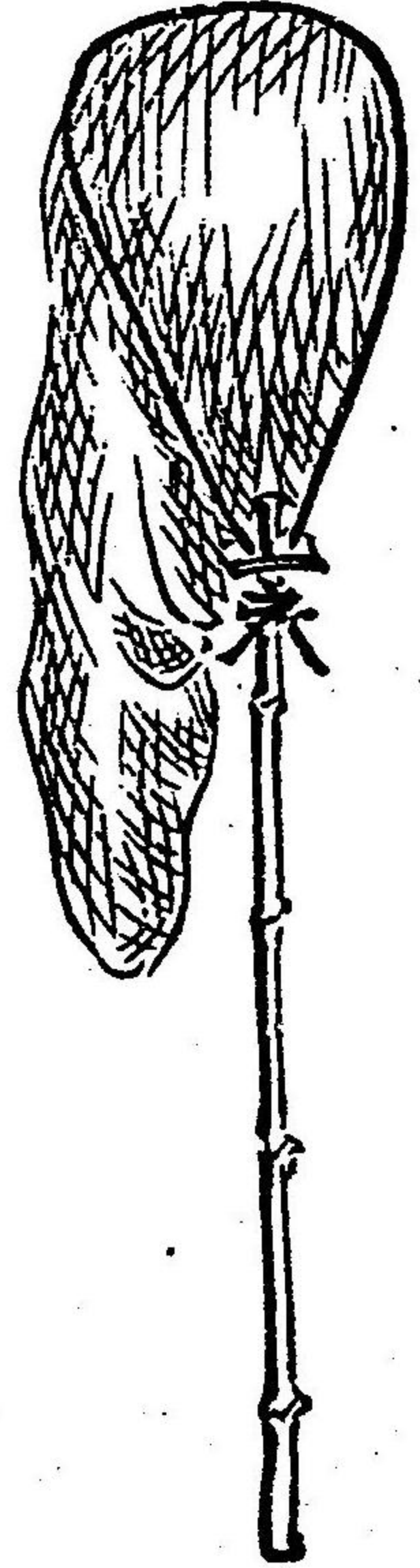
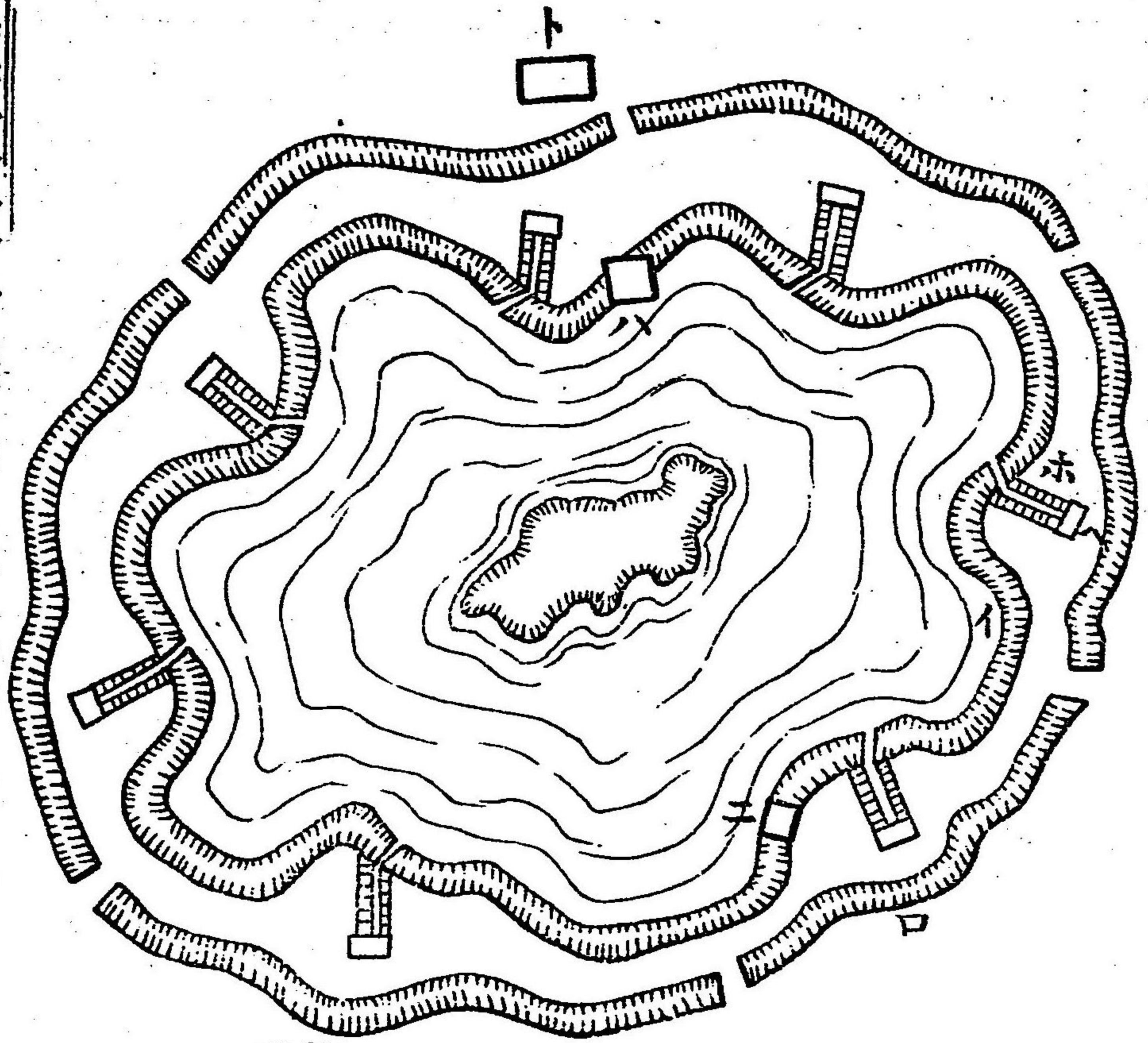
新宿御苑羣鳥記

◎摘解 羣 鼻吉、切字書には、小き網にして、長き柄なりとあり、然れども、實際羣を捕ふる網は、其口の大き、豎二尺五寸、横一尺五寸位あり。安息日 日曜日。羸 力爲、切瘦なり、又つかると訓ず。家鷺 あひるなり。

◎圖解 新宿御苑の鳥場は、拜見せざれども、此の本文を案ずるに、其の構造、他の鳥場と異なることなきやうなり。依て他の鳥場の圖を示して、参考に資せん。

イは、内側の土手にて、土手の上には、一面に竹藪ありて、池の見えぬやうに爲す。ロは、外側の土手にて、是れにも竹木等あり。ハは、大のぞきといふ。鳥を窺ひ、且餌を與ふる爲に設けたる小屋なり。ニは、小のぞきといふ。是れも前に同じ。ホは、溝にて、鳥を捕ふる場所なり。

漢文教科書卷之二備考終



へは高さ六尺程の門のやうなるものなり。そこに小き穴ありて、鬼の有無を窺ふ。
トは、休息所なり。

明治三十五年五月十一日印刷
明治三十五年五月十六日發行

漢文教科書備考
定價 卷之一 金貳拾錢
卷之二 金貳拾錢

著者

秋山四郎

印刷者兼

金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表者

右社長 原亮一 郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

印刷所

會社 東京國文社

東京市京橋區宗十郎町十五番地

賣捌所

各府縣下特約販賣所

不許複製

322
346

